

# 対人ネットワークと心理的距離が 異文化適応に及ぼす影響

## — 東アジア3カ国比較 —

沈 育 萱・有 馬 淑 子

### 要 約

本研究は、日本、台湾、中国、韓国の各文化圏における対人ネットワークが、留学生や海外勤務者の異文化適応過程にどのように影響を与えるかを検討するものである。第1研究では、2012年に実施された国際比較研究(EASS: East Asian Social Survey)のデータを用いて、東アジア4カ国の対人ネットワークの違い、とその対人ネットワークに影響を与える要因を探索的に検討した。第2研究では、日本人・台湾人・中国人を対象としたインタビューを行い、どのような過程を経て異文化適応に到るのか、その心理的過程や文化的背景を検討しようとするものである。本研究の目的は、社会的ネットワーク形成傾向として示される文化的な差異が異文化適応に関わるとの仮説に基づき、日本に住む他国人や海外に渡航する日本人の一助となる知見を得ることである。

第1研究と第2研究を通じて、互いに異なる対人ネットワークを持っていても、根気よく相手とのコミュニケーションすることさえできれば、異文化に適応することは可能だろう。人に迷惑をかけてはいけない」のような距離感は日本人の礼儀の中に、生活の中に、子供の時から感化を受けて知らず知らずのうちに存在しているものと想像される。このように習慣化された思考を自ら意識して変化させていくには、やはり異文化に属する他者との長い時間をかけたコミュニケーションが必要になるだろう。

## I 序 論

### 1-1. はじめに

本研究では、留学生や海外に就職した人々が異文化に適応する過程において、日本、台湾、中国及び韓国の各文化圏における対人ネットワーク形成傾向がどのように影響するかを検討する。

1983年に日本政府が「10万人留学生計画」を発表して以来、来日留学生数は増え続けて、2006年に117,927人に達した(文部科学省, 2007)。2008年には少子化対策の一環として“留学生を増やし2025年に留学生100万人”という目標も教育再生会議で取り上げられた。今後ますます日本社会にとって留学生の存在は大きなものとなることが予想される。独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の「外国人留学生在籍状況調査結果」では、令和2年度外国人留学生数は279,597人(前年比 32,617人(10.4%)減)に達したと報告されている。留学生の増加とともに日本社会への適応問題が課題となり、適応の実態から関連要因や不適応への対応まで多く検討されている。

異文化交流の機会としては、短期と長期の留学生、就職、恋愛や国際結婚などの多くの場面がある。それぞれの場面において、文化的な関係構築や文化による認知の違いが異文化適応において困難をもたらしているだろう。特に、本研究では、日本と中国または台湾との、心理的距離と呼ばれる他者との距離の取り方の違いに注目する。留学生の異文化適応には、それぞれの文化圏が形成する対人ネットワークの傾向が影響するのではないかと仮説に基づき、対人ネットワークと心理的距離についてインタビューを通して検討する。本研究の意義は、どのような過程を経て異文化適応に到るのか、その原因や方法を理解することにより、日本で生活している外国人たちや、海外に渡航する日本人に対する一助とすることである。

## 1-2. 先行研究

### 1-2-1. 異文化適応

外国人に対して、新環境の適応が一番重要となるのは、新しい友達ができるかどうかという異文化交流である。日本人は、他国からの留学生をどの程度受け入れているだろうか。岡太(2011)は、EASS 2008年度のデータを用いて、日本・韓国・中国・台湾のそれぞれにおいて、他国の出身者を、職場の同僚、地域社会の居住者、結婚相手として受け入れる受容性の差を分析している。非対称多次元尺度解析の結果、他国を受容するか、拒否するかを分別する2次元が見いだされた。この2次元は、職場、地域社会、結婚による受容性に共通していた。第1次元は、受け入れてくれる国の人々は受け入れるという互惠性の関係が示された。他国から最も受け入れてもらいやすいのは台湾であり、韓国は受け入れてもらいにくい。第2次元では、中国は他国を受け入れるが、他国は中国を受け入れられないという非対称性が見られた。この研究結果は、日本は中国からの留学生よりも、台湾からの留学生をより受け入れやすいことを示唆している。

中国や台湾からの留学生が日本に来るときは、日本の日本語学校などを経て、大学に入学するルートが一般的である。よって、留学生は、ある程度日本での生活に慣れていると思われる。しかし、大学進学後は日本語学校での日本語を学ぶ授業と異なり、日本語で専門分野の授業を受け、レポートなどを書き、日本人学生と交流やグループワークなどをしていかなければならないという新たな異文化適応課題が生じる。

楊益・伊藤(2018)は、PAC分析を行い、在日外国人留学生の大学入学期の心理状態を探り、その情緒的变化を明らかにした。分析の結果、大学新入生は入学直後に不適応に陥りやすく、特に留学生の場合は、異文化への適応も必要と示されている。留学生が直面する具体的な適応問題の類別として、日本語の困難、勉強面の困難、経済の困難が大きい。そこで、楊益・伊藤は、今後の課題として、留学生の支援は入学直後だけではなく、入学後の2、3か月後も必要となる。日本語と勉強面の困難は誰でも経験

することだが、新入生同士の交流を深める行事等は、日本人学生同様、入学期に新しい環境と人間関係に不安をもつ留学生によっても、有益である。活動、支援、交流などに参加するには、ある程度の時間的、経済的余裕が必要である。そのため、留学生に対する経済支援や、日本人学生との協働学習や交流活動への助成などが重要となる。

### 1-2-2. 心理的距離

心理的距離 (Psychological Distance) とは、心理学の概念である。APA 心理学大辞典では、「誰かあるいは他の人々との情緒的関与から離脱している程度」と定義されている。

一般的には、ヤマアラシのジレンマという言葉で知られる概念である。二匹の寒いヤマアラシは暖をとりたいと思って寄り添っているが、お互いの体のとげが刺さってしまったために、繰り返して、やっと適当な距離を見つけた。そのヤマアラシみたいに、人間関係でもその適当な距離をとり、自分と他人との間に外顕または内隠の距離が必要ということを認め、他人の感情、趣味、プライバシーなどを尊重することを含む。すべての人は自分の空間が必要であり、他人の空間も尊重しなければならない。もし二人が接近しすぎて、互いの領域を侵犯した場合、衝突を招きやすい。

「心理的距離」は最初に「美的感覚の概念」を説明するために用いられた。1912年、ケンブリッジ大学に勤務するスイスの心理学者エドワード・ブロウ (Edward Bullough) はイギリスの心理学誌で「芸術の一要因と美的原則としての『心理距離』」という文章を發表し、心理的距離の概念を正式に發表した。ブロウは、美の純粋な客観性は存在しないと考えている。客観基準、準則と範疇を使って美を定義して、多くの多彩な美感事実を抹殺する。心理的距離とは空間や時間的な距離を指すのではなく、鑑賞者が芸術作品に対して示すものが感情的、または心理的に保たれている距離のことである。この距離は鑑賞者の作品に対する実用的な態度を取り除いたことによって、美感が快感を引き出すので、鑑賞者は目の前の物事に対して新しい体験を生み出す。「美的感覚の発生は、個人的な主観的認識と芸術

品の心理的距離によるものである」ということである。

現代の私たちはよく「心理的距離」という表現を用いるが、これは人と人との間の親疎関係、気が合う程度、そしてよく知らないという感覚の形容である。心理学研究の文脈としては、西田・石川(2017)が次のように定義している。友人関係における心理的距離とは、友人との間に存在する二者間の親密さの程度であり、近づこうとする動きと遠ざかろうとする動きの両方がある。

友人関係の研究文脈では、岡田(2005)は現代青年に特有な友人関係に関して、青年自身がどのような友人関係の取り方をするかについて着目し「自己閉鎖」「軽躁の関係」「侵入回避」「傷つけられ回避」の四つの下位尺度から成る友人関係尺度を作成している。結果は、大学生自身の方が友人をより遠くに位置づけていると認知している群は、互いに同じくらいの距離に位置づけていると認知している群に比べ、友人関係において自分の内面を開示しない傾向を表すと考えられる。

初めて心理的距離という言葉を知ると、頭に浮かんでいたのは1997年香港の小説家—張小嫻の『荷包裡的單人床』の小説の中で「世界で一番遠い距離は生と死の距離ではなく、天と地の違いではなく、あなたの前に立っていますが、あなたは私があなを愛していることを知らないことだ」の話である。心理的距離というものは、私にとって、人が周りのいろいろな人間関係を個人の主観的な感覚で、近いか、ちょうどいいか、遠いか、などの距離を作ったものだと思う。このような見えず、触れもしない心理的距離というものは自分が感じるしかない。谷口・池上(2018)の解釈レベル理論によると、対象を表象する方式は対象との間に知覚される時空間的距離(心理的距離)によって規定される。「心理的距離が遠いあるいは近いと知覚されるかは、あくまで主観的であるため、物理的、客観的距離とは異なる」という言葉は私が思う心理的距離概念を定義することができる。社交の距離は現代社会で多くの変形に直面し、多様な様相を呈しており、そこで多くの親しい距離が試された。そのため、自分の位置付けがはっきりし

ている以外に、他人の気持ちを大切にすることを考えなければならないと思う。

### 1-2-3. 信 頼

他者との信頼は二つの要素が必要だと考えられる。一つ目は自分がその人との関係の中でどのような価値を主張しても、理解され、受け入れてもらえること、二つ目は相手が自分を利用したり、自分と共有している情報を自分の不利になるように用いたりしないと信じていることである。その二つの要素から特定他者との信頼が形成され、その経験から、一般他者への信頼感が生じると考えられる。信頼感とは現在までに個人がそれぞれ獲得、形成してきたものである。したがって、信頼感を高めるには他人を信頼することだけではなく、自分自身について信頼することもとても重要である。高い信頼感を持つ人は健康的なパーソナリティを持っていて、一定のポジティブ特性があると思う。金原・巖(2012)は、信頼感とは、「個人が健康的、安心して生活するための重要な個人内の特性である。」としており、積極的な日常での出来事は肯定的な信頼感を維持するために重要な役割を果たしているが、一方で消極的な日常での出来事は、直接的な体験頻度以外に、個人のこれまでの信頼感にあまり影響しないということを示している。

また天貝(1995)は、信頼感を「人や自分を信じ、頼ることができるという気持ち」と定義し、自分の能力と他人の存在について一貫した確信を持ち、個人の健康的な特性の発展や発達と密接につながっていると考えた。菅原・田村・嶋野(2005)は、信頼関係は誕生時点から日常生活のさまざまな場面と人間関係を通して構築されていくとしている。一方、信頼感はいくつかの個人がそれぞれ獲得、経験、形成してきたものであり、信頼感の程度には個人差がある。日常生活で起こる出来事は、個人差を生じさせる要因の一つである。したがって、日常生活での出来事は、日常の人間関係における形成される信頼感に影響を与える。

以上より信頼感はいくつかのポジティブ、積極的なことを維持し、個人の経

験から形成してきたものなので個人差があるという特性を示している。

山岸の信頼の解き放ち理論によれば、他者との協力関係を保証する社会的不確実性の低い安心状態は、信頼性に関する情報を持たない他人への一般的な信頼形成を阻害する。ここでの「信頼」とは、「相手の人格や行動傾向の評価に基づいて、相手の意図に対する期待」である。それに対して「安心」とは「相手の損得を計算して相手の行動に期待すること」である。また、「相手の行動によって自分が危険な状態にある」ことを「社会的不確実性が存在する状態」と言う。では、「信頼」に意味がある場合は「社会的不確実性」がある場合である。それに対して、「社会的不確実性」がない時には、人は「安心」を感じている。「相手が自分に不利なことをしたら、相手に対しても不利な状況になる」という場合、「相手の被るであろう不利益」は「社会的不確実性」を解消する状況である。

#### 1-2-4. 対人ネットワーク

対人ネットワークとは、所属集団内の規範と照らし合わせて、特定の情報、メッセージを受け入れるか拒否するかを意味する。ネットワークを簡単に言えば、人と人とのつながりである。人と人とのつながりから生じたものが社会である。様々な地域の人々のつながりから生じる様々な社会のつながりは、それに繋がる人にとっては、社会的資本となる。社会的資本とは、信頼、規範、ネットワークなど、社会や地域のコミュニティの人々の相互関係の重要性を資産として説明する考えである。

古谷(2008)によれば、社会的資本とは人々の協調行動の活発化が社会効率を高めるという考えに基づき、社会の信頼関係、規範、ネットワークなどの社会組織の重要性を説明する概念である。個人ネットワーク、ネットワークメンバー間で共有される相互性規範、ネットワーク内の各メンバーが感じる信頼の3要素から構成される。したがって、人、対人関係、そして社会の三つのレベルに置いて、対人ネットワーク、心理的距離、信頼感が社会的資本形成に重要な要因となる。

本研究では、ソーシャルキャピタルの2種類の分類に着目する。結合型

資産と橋渡し型資産である。内部結合型資産は他のクラスターとのブリッジのリンクが少ない所属集団のネットワーク内の交流からもたらされる資産である。内部結合型資産が充実している社会には、同質の人々の間に強い人間関係のネットワークを構築し、相互に強い信頼感を形成し、困難な時に助け合う互恵性規範が存在する。

橋渡し資産は他のクラスターとのブリッジのリンクが多い、個人のネットワークだけではなく、他のクラスターを認識したり、交流したりして、新しいネットワークを作るということである。

これに対して、異なる集団間の異質な人間や組織の結合をもとにして作られるのが橋渡し型資産である。橋渡し資産が豊かな社会の中で、異質で多様な人々が開放的な対人ネットワークを形成し、見知らぬ他者を信頼し、他人を助けるなら、見知らぬ他者からも助けてもらえるという、一般化された互恵性規範が形成されやすいと予想される。その結果、異質な人々との協調や協力を通じて、結合型資産のみでは得られなかった情報とサポートを得ることになる。しかし、異質な人々との相互作用が必要とする橋渡し型資産を形成するのは容易ではない。また、たとえ形成された後も、さまざまな、異質な他人を受け入れ続けるコストが伴う。そのため、橋渡し型資産を維持するために、大量の資源を投入する必要がある。

橋渡し資産は他のクラスターとのブリッジのリンクが多く、個人のネットワークだけではなく、他のクラスターを認識したり、交流したりして、新たなネットワークを構築するということである。本研究で用いる用語でいうと、開放的ネットワークで、橋渡し資産が大きいということである。したがって、対人ネットワークでの他のクラスターとのブリッジのリンクを多く持っている人は、新しい人を知り合う機会があれば、開放的にまず了解したり、交流したりする行動がある。その人の対人ネットワークは、開放的ネットワークと定義すると思う。逆に、他のクラスターとのブリッジのリンクを少なく持っている人は、新しい人を知り合うより、自分が慣れている人々によく接触したり、近況を共有したりする行動の方が多い。



その人の対人ネットワークは、閉鎖的ネットワークと定義する。

閉鎖的ネットワークの文化は、異なる考えを受け入れ難い特性があることがネットワーク研究から知られている。そこで、開放的ネットワークの文化から閉鎖的ネットワークの文化に移住しようとする場合、その逆よりも困難を感じやすいことが予測される。

### 1-3. 本研究の目的

海外に一定時間以上滞在した場合では、程度の違いこそあれ異文化衝撃や異文化適応の問題を避けて通ることはできない。それは、滞在地の言語の熟達度、海外経験、知識、自国と滞在先国の間の文化的、地理的距離に関わらず、また本人の認識がどうであれ発生する現象である。上述したように、どんな人でも、どんな国でも、人々の心理的距離の違い、お互いの関係認知の違いなどの異文化適応についての困難を感じさせるのではないだろうか。そこで、友人形成する過程の差が、どのような困難をもたらすか。滞在先国での異文化適応には、それぞれの文化圏によって形成された対人ネットワークの傾向が日本人と留学生に影響を与えるとの仮説に基づき、対人ネットワークと心理的距離と信頼感について EASS とインタビューを通じて検討する。

#### 1-3-1. 本研究の仮説

##### ◎理論的仮説

本研究は、台湾・日本、そして中国の東アジア諸国における対人ネットワーク形成に違いがあることを示し、その対人ネットワーク行動が各国の心理的距離と異文化適応のあり方に違いをもたらすことを仮説として検討する。

先行研究で検討したように、対人ネットワーク研究では、内部結合型資産と橋渡し型資産の二つが検討されてきた。本研究では、これを山岸らの信頼の概念と絡めて検討する。そのため、社会的流動性の高い文化で形成される開放性の高い(クラスター間のリンクが多い)ネットワークと、開放性

の低い(クラスター間のリンクが少ない)ネットワークの差異に注目し、前者を開放的ネットワーク、後者を閉鎖的ネットワークと呼称する。

山岸(1995)による信頼の概念整理では、様々な上位概念が存在するが、本研究で扱うのは、意図に対する期待としての信頼である。例えば、ある相手に依頼をした状況で、その依頼を遂行する意思があると考えるのが、意図に対する期待である。そして、意図に対する期待としての信頼においても2種類あると山岸は指摘しており、相手の友好的行動に対する期待が、相手の自己利益の評価に根差している場合を「安心」、その安心の部分を取り去った残りの部分である客観的行動予測を越えた期待を「信頼」と定義している。また、そうして定義された狭義の信頼においても、自分と特定の関係のない他者一般の人間性のデフォルト評価値である一般的信頼と、自分と何らかの関係にある特定の相手に対するパーソナルな信頼を区別することができる。

山岸らの研究により、日本はネットワークの閉鎖性が高いと予測される。台湾・中国は日本に比べて開放的ネットワークが見いだされるだろう。

このことを、第1研究の調査データから実証したのちに、それらのネットワークの違いがもたらす信頼感と心理的距離の差を検討する。日本では台湾・中国に比べて同程度の関係性(例えば、近所の顔見知りなど)に対する信頼感が低く、心理的距離が遠いだろう。一方、日本は他国に比べて、組織に所属する人への信頼感が高いだろう。

以上の仮説から、開放的ネットワークをもつ国から閉鎖的ネットワークをもつ国への適応は困難なものになると予想される。この最後の異文化適応に関する仮説については、おもに第2研究のインタビューを通じて検討する。ただし、第1研究でも、どのような行動がネットワークを広げる適応行動になるのかを探索し、第2研究のインタビュー結果と照らし合わせて検討を行う。

### 1-3-2. 第1研究

第1研究では、4カ国(日本、台湾、中国、韓国)のネットワークの差異を

了解するために、EASSでの各職業の人々と交流ネットワークのデータ（職業ネットワーク）を一元配置分散分析し、4カ国のネットワークの種類を定義する方法での一つと示す。それから、職業ネットワークとEASSのデータとを回帰分析し、どのような関係、組織、場所を通じて、各職業の人々を交流できるかどうかを確認できる。

社会的調査では、社会的距離の指標として、家族・地域社会・見知らぬ人、などのカテゴリーが用いられているが、心理的距離は社会的距離とは異なり、主観的な「付き合い易さ」が入る指標である。本研究では、「外食時に知らない人と付き合いが始まることがあるか」「地域社会における付き合いの程度(挨拶頻度など)」を、心理的距離の指標とする。すなわち、偶然出会った人と付き合いを始められる、あるいは顔見知り程度の人と付き合いを深められるかどうか、の行動指標となる。信頼感については、天貝(1995)は、信頼感を「人や自分を信じ、頼ることができるという気持ち」と定義する。本研究では「人間の本性は善か悪か」、「一般的信頼感」、「社会的カテゴリーに対する信頼感」を信頼感の指標とする。つまり、最初の信頼感は何のぐらいたっているのか、を基準となる。

4カ国の社会的資本を形成する間に、ネットワーク、心理的距離、信頼感についてのものが含まれている。EASSのすべてのデータの一つずつに一元配置分散分析し、4カ国と有意を持った質問項目はネットワークの指標、心理的距離の指標、信頼感の指標と定義できることを示す。ところで、信頼感についての指標は一元配置分散分析した信頼感の指標だけではなく、因子分析により合計変数指標を作成する社会的カテゴリーに対する信頼感がある。4カ国はネットワーク、心理的距離、信頼感の各指標とを回帰分析し、各結果を比較して、4カ国のネットワークは開放的ネットワークか、閉鎖的ネットワークか、を定義できる。友人関係になれる重要なポイントはお互いの心理的距離である。心理的距離が遠いと、誰でも近づかないことができなくなる。したがって、ある国と各指標と分析した結果では心理的距離の指標が特に低いと示せば、その国は閉鎖的ネットワークである。

逆に、もしある国と各指標と分析した結果は心理的距離の指標が高いと示せば、その国は開放的ネットワークである。

仮説は日本の対人ネットワークは中国、台湾、韓国の3カ国と比べて閉鎖的だろう。閉鎖的ネットワークを仮説される日本は中国、台湾、韓国に比べて、信頼感が低いだろう。そして、心理的距離も遠いだろう。

### 1-3-3. 第2研究

第2研究では、3カ国(日本、台湾、中国)の実際の異文化を接触すると、どんなイメージを生じるか、どんな異文化適応を経験するか、どんな心理的距離を作って、変わるか、などの対人ネットワークの変化を調査するために、外国人と知り合う経験を持っている人にインタビューをした。インタビューをする前は、研究参加への同意、国籍、年齢、性別、職業や信頼感についての事前質問紙の後に、半構造化面接を行う。コロナの原因で、インタビューは対面ないし、Web会議を通じて行って収集した。したがって、研究対象者にコード番号を与え、インタビューの内容の録音ファイルにはコード番号をファイル名とする。実験参加者氏名は紙媒体でも電子媒体でも保存されない。第1研究でのEASSには厳密な質問紙設計が行われている。第2研究はその分析結果に基づき、事例研究を行った。結果は、各質問項目に対する回答内容を、単文に分割して、研究対象者の特定や時期ごとにまとめる。質的データ分析としては、頻出単語の同時生起確率によるテキスト分析を実施する予定である。比較のため、中国語によるインタビュー結果は、日本語に翻訳する。テキスト分析の結果と、ネットワーク図に描かれたリンクの数、ネットワークの発達との関連性を検討する。

日本、台湾、中国、韓国は対人ネットワークと心理的距離の違いを確認できて、各適応に通じる組織や特徴から異文化を了解できる第1研究で、それを異文化適応にどんな影響を生じるかがわからないため、第2研究においてはインタビューを用いて、来日の台湾人と中国人、とそれを受け入れる日本人との対人ネットワークと心理的距離の違いから実際の異文化適

応過程にどのような影響を持つか、開放的ネットワークと閉鎖的ネットワークの国の人々との異文化適応過程はどうなっているのかを検討する。第2研究の目的は、その異文化適応経験から、日本に住む外国人や海外に渡航する日本人が3カ国の人々が3カ国に共通する側面と異なる側面を明らかにする。第1第2研究を通じて、異文化コミュニケーションにより、その違いを乗り越えるための知見を供することが本研究の目的である。

## II 第1研究

### 2-1. 方 法

#### 2-1-1. EASS

EASS(East Asian Social Survey, 東アジア社会調査)(2012)とは、欧米の研究者を中心とした国際比較調査では、東アジア社会特有の問題と関心に基づいて、共通の問題(モジュール)を設定し、国際比較分析を行う項目である。プロジェクトは2003年6月に大阪商業大学で開催された「JGSS 国際シンポジウム2003」をきっかけにスタートした。JGSSのチームとともに、GSSをモデルにした調査を長年実施してきた台湾(中央研究院社会学研究所チーム)と、韓国版GSSを開始した韓国(成均館大学 Survey Research Center チーム)が設立された。その後、中国版GSSを実施している香港科学技術大学・中国人民大学調査研究チームも加わり、4カ国・地域でEASSを実施している。

EASSの方法的特徴は、独自の国際比較調査を新たに作成するのではなく、各国・地域で継続的に実施されている社会調査に共通の質問群(モジュール)を加えて国際比較を行うことである。このモジュールの組み立ては2年に1回続けます。既存の実績を活用した調査を継続し、効果的、安定的に国際比較調査を継続することを目標にしている。

モジュール作成のために年に2回、4チームが参加しての国際会議を開催している。本研究で用いていた第4回となるEASS 2012は「東アジア

の社会的ネットワークと社会関係資本」という調査テーマであった。

EASS 2012における社会的ネットワークに関する質問項目は、人とのつながり(例えば、1日に接する家族・親族以外の人は何人いますか)、組織への参加とネットワークの特徴(例えば、どのような組織・団体に参加していますか)、社会関係資本の構築と活用(例えば、家族や親類以外の人と外食したり飲みに行きますか)、地位の異なる他者との議論(例えば、社会問題や出来事について意見が違っても、立場や地位が自分と同じぐらいの知り合いと意見交換ができますか)である。

社会参加に関する質問項目は地域の助け合い(例えば、自然災害が起こったとき、地域の人々は協力し合うと思いますか)、政治への関心と参加・ボランティア活動(例えば、過去1年間にボランティア活動に参加したことがありますか)である。信頼についての質問項目は信頼(例えば、人間の本性についてどう思いますか、人は信頼できると思いますか)である。本研究で取り上げた質問項目を、2-1-2に添付する。

4カ国(日本・韓国・台湾・中国)の調査データ EASS 2012の4カ国の調査方法は、日本(JGSS)の調査員による面接法と留置法を併用し、全国の20～89歳の男女9,000人が取られている。台湾(TSCS)の調査員による面接法は全国の18歳以上の男女5,819人が取られている。韓国(KGSS)の調査員による面接法は全国の18歳以上の男女2,500人が取られている。中国(CGSS)の調査員による面接法は全国の18歳以上の男女4,104人が取られている。

#### 2-1-2. 本研究で用いた質問項目

##### ◎ネットワークの指標

- 接触人数(家族以外) v17. 普段1日に接する家族以外的人数
- 接触人数(就職活動) v31. 就職で紹介してくれた人数
- 就職紹介効用感 v32. 人々から就職紹介が役にたったか
- 外食頻度(家族以外) v33. 家族以外の人々との外食頻度

##### ◎心理的距離の指標

ネットワーク獲得経験(外食時) v37. 外食時に知り合いができるか

地域挨拶人数 v43. 近所で挨拶する人数

地域相談人数 v44. 近所で相談する人数

地域協力関係 v56. 自然災害時の近所の協力程度

地域配慮関係 v69. 近所の人は互いに気にかけているか

◎信頼感の指標

人間の本性 v87. 人間の本性は善か悪か

一般的信頼感 v88. 一般的に人間はどのくらい信頼できるか

◎社会的カテゴリーに対する信頼感

社会的カテゴリー別に、どの程度相談するか

以下のそれぞれの社会的カテゴリーに対する信頼

公的信頼【地方公務員 国家公務員 警察官 自衛隊員 裁判官】

私的信頼【友人 近所の人 職場の人】

組織信頼【銀行員 企業経営者 報道関係者 非政府組織 教員】

◎その他

職業ネットワーク v19.～v28. どのような職業の人と交流があるか

【大学教授 弁護士 看護師 コンピュータプログラマー 中学校の  
教員 人事担当者 農業従事者 美容師 受付係 警察官】

組織参加 v4.～v12. どのような組織に参加するか

【政治団体 地縁組織 ボランティア 市民の会 宗教団体 同窓会  
スポーツクラブ 労働組合 専門職団体】

同質性 v15. 参加している組織内の人々の同質性？

海外居住知人 v29. 海外に住んでいる親類, 友人, 知り合いがいるか

外国人知人 v30. 外国人の知り合いがいるか

地位配慮(外食) v34. 外食の時, 地位の高い人が最初に話し始めるか

会話独占(外食) v35. 外食の時, 1人か2人の人が会話を支配するか

地位配慮無用 v46. 意見が違って, 立場や地位が高い知り合いの人と  
話ができる

教育問題会話 v49. 地域での教育問題について3人以上で話し合うこと

地域援助関係 v70. 近所の人は手助けしてくれる

### ◎用いていったデータ

社会的カテゴリーに対する信頼感、因子分析により合計変数指標を作成した。一般的信頼感・人間の本性の項目は単独項目の指標とした。以上の信頼感に対して、ネットワーク指標がどのように影響するかについて、回帰分析により検討を行った。また、すべての指標に対して、4カ国の平均値の差を分散分析と多重比較分析により検討する。

### 2-1-3. 操作的定義

#### ◎ネットワークの開放性について

職業ネットワークの数値がネットワークのつながりの多さの指標となる。すなわち、交流のある職種の数が多いほど、開放的ネットワーク、少ないほど閉鎖的ネットワークとする。しかし、ネットワークの開放性の指標は、単に知り合いの数にとどまるものではない。他のネットワークの指標として、1日の接触人数(家族以外)、接触人数(就職活動)、就職紹介効用感、外食頻度(家族以外)の4項目をネットワークの指標とした。

心理的距離の指標としては、ネットワーク獲得経験(外食時)、地域挨拶人数、地域相談人数、地域協力関係、地域配慮関係の5項目の結果である。数値が高いほど、心理的距離が近くなることを示す。すなわち、家族以外の他者を受け入れる程度の高さを示す。最後に、信頼感の指標として、人間の本性、一般的信頼感の2項目を用いた。数値が高いほど、見知らぬ他者と最初に接触した際に、信頼して、良い人と思いやすい傾向を示す。これらの、心理的距離の指標と信頼感の高いネットワークを本研究では、開放的ネットワークの特性として用いる。

閉鎖的ネットワークの特徴としても、大きい影響力を持つのは単に知り合いの数の多寡ではなく、心理的距離の指標と信頼感の指標と考える。他者と知り合う機会が少なく、心理的距離が遠く、信頼性の低さの特徴を持



つ対人関係ネットワークを、閉鎖的ネットワークと定義する。

#### 2-1-4. 仮 説

日本人は心理的距離が遠いと思うため、日本の対人ネットワークは中国、台湾、韓国の3カ国と比べて閉鎖的だろう。閉鎖的ネットワークを仮設される日本は中国、台湾、韓国に比べて、信頼感が低いだろう。

### 2-2. 結 果

- 1) 因子分析
- 2) 各指標の国際比較
- 3) 回帰分析

従属変数は職業ネットワーク 独立変数はその他の変数

国別回帰分析 係数が変わるか

#### 2-2-1. 信頼感の因子分析

社会的カテゴリー(職業)に対する信頼感を測定した14項目に対して、因子分析した結果を示す。

全項目に対して、最尤法プロマックス回転を用いて、因子数を探索したところ、4因子が見いだされた。どの因子にも負荷しない項目(初対面の人と医者)を削除して、再度因子分析をした結果、3因子が見いだされた。改めて3因子を指定して、確証的因子分析した結果から、説明力の結果を表(Table 1)に、因子負荷量の結果を Table 2 に示す。

第1因子に高く負荷した5項目(地方公務員、国家公務員、警察官、自衛隊員、裁判官)の合計点を5で渡点を公的信頼の点を指標とする。第2因子に高く付加した5項目(銀行員、企業経営者、報道関係者、非政府組織、教員)の合計点を組織信頼の指標とする。第3因子に高く付加した4項目(親類、友人、近所の人、職場の人)の合計点を4点で渡っていた私的信頼を指標とする(Table 2 に示す)。

最後に信頼性係数はまず、第3因子(私的信頼)は、cronbach の  $\alpha = .741$ 、組織信頼は  $\alpha = .762$ 、公的信頼は  $\alpha = .872$  である。公的信頼の信頼性が

Table 1 説明された分散の合計

因子	初期の固有値			回転後の負荷量平方和*
	合計	分散の%	累積%	合計
1	5.499	39.278	39.278	4.303
2	1.673	11.952	51.229	4.161
3	1.100	7.856	59.086	2.702

Table 2 パターン行列\*

	因子		
	1	2	3
自衛隊員	0.867	-0.103	0.035
裁判官	0.845	-0.048	0.001
警察官	0.823	-0.022	0.015
国家公務員	0.448	0.404	-0.087
地方公務員	0.427	0.342	-0.034
非政府組織	-0.114	0.727	-0.029
報道関係者	0.054	0.679	-0.067
企業経営者	-0.045	0.554	0.095
銀行員	0.152	0.420	0.087
教員	0.238	0.409	0.074
友人	0.005	-0.144	0.808
親類	0.074	-0.054	0.602
職場の人	-0.047	0.158	0.558
近所の人	-0.023	0.237	0.518

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

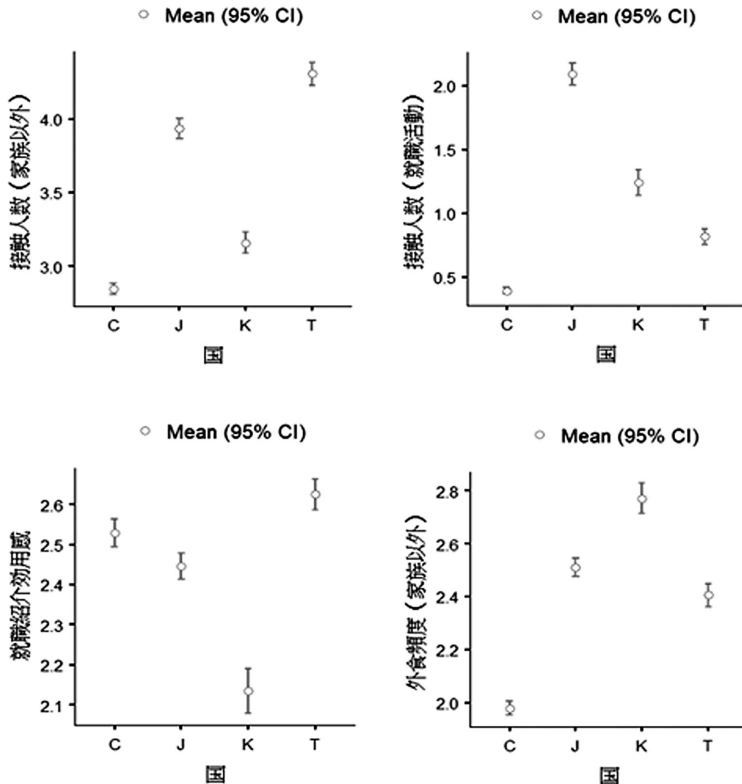
\* 5回の反復で回転が収束しました。

もっともよいが、私的信頼、組織信頼も.74以上あるため、このまま用いた。

#### 2-2-2. 4カ国比較

##### ◎ネットワークの指標

EASSでのネットワーク、心理的距離、信頼感の各指標に対して、4カ国比較を行った。1要因分散分析の結果、有意な差がみいだされた結果に



(注1) 対人ネットワークの指標の標準偏差などの数値はVI巻末資料である。

Figure 1 接触人数(就職活動), 就職紹介効用感, 外食頻度(家族以外)

については、多重比較検定により、どの国とどの国のあいだに差が見いだされたかの検定を行った。ネットワークの指標としての項目の結果はFigure 1に示す。【接触人数(家族以外)】は  $F(3,4170) = 506, p < .001$ , 日本と台湾に差無し、日本と台湾は韓国と中国より1日に接する人数が高い。【接触人数(就職活動)】は  $F(3,3281) = 514.6, p < .001$ , 日本と韓国に差はなく、台湾や中国よりも就職で紹介してくれる人数が多い。【就職紹介効用感】は  $F(3,1738) = 72.5, p < .001$ , 日本と中国に差無し、台湾の役

に立つ率は一番高く、韓国は就職紹介が役に立つ率が低い。【外食頻度(家族以外)】は  $F(3,4214) = 329.9, p < .001$ , 日本と台湾に差無し, 韓国の外食頻度が一番高く, 中国が一番低い。

以上の結果から, 対人ネットワークの特徴としては, すべての指標に置いて対人ネットワークが広い国は存在しないが, 日本は比較的接触人数が多く, 中国が低い傾向にある。

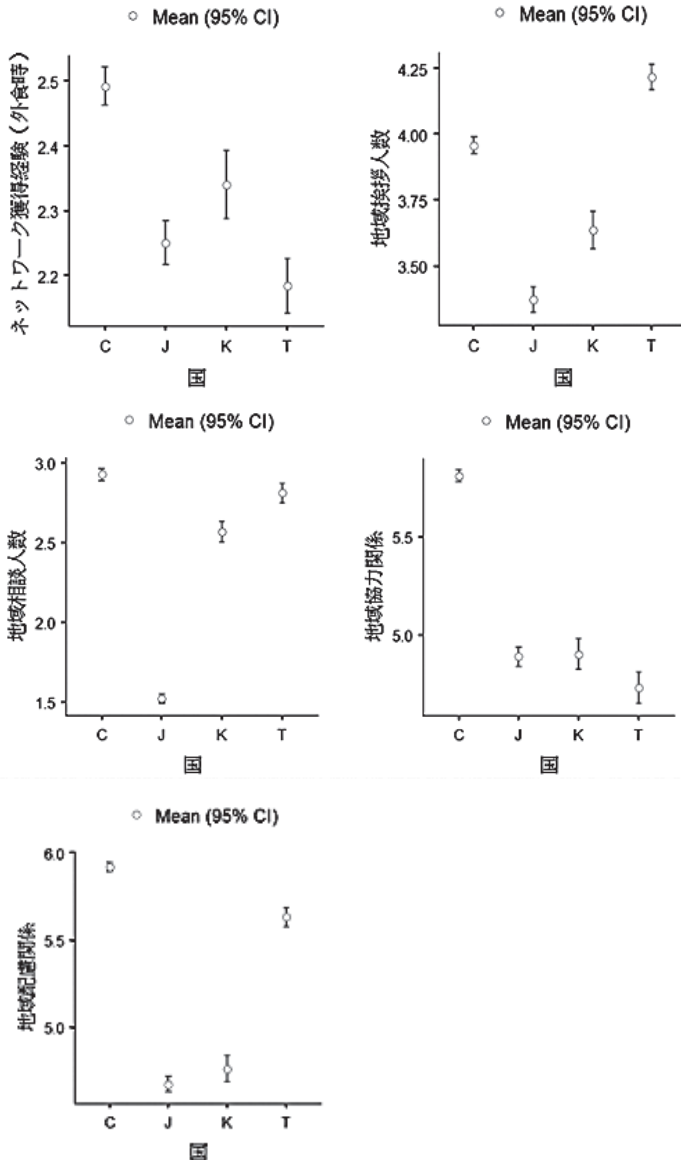
#### ◎心理的距離の指標

EASSでは, 心理的距離の近い人(家族や友人)や遠い人(他人)ではなく, 中程度の人(顔見知り)に対する態度の4カ国の差を分析して, 心理的距離の違いとして捉える。近所的人是, 中程度の人として想定される。心理的距離の指標としての項目の結果は Figure 2 に示す。【ネットワーク獲得経験(外食時)】は  $F(3,3473) = 60.2, p < .001$ , 日本, 台湾と韓国はほぼ同じで, 中国が一番高い。【地域挨拶人数】は  $F(3,4169) = 225.3, p < .001$ , 4カ国全て差があり, 日本が少なく, 台湾が多い。【地域相談人数】は  $F(3,4228) = 1279, p < .001$ , 4カ国に差があり, 日本が特に少ない。日本は近所の人とは付き合いたがらない。【地域協力関係】は  $F(3,3743) = 508.1, p < .001$ , 中国だけが高く, 協力する。【地域配慮関係】は  $F(3,3844) = 877, p < .001$ , 日本と韓国に差無し。中国と台湾では, 日本や韓国よりも, 地域社会で互いに気にかける関係にある。

全体として, 中国がもっとも密接な地域社会を構成しており, 日本が最も低い傾向にある。台湾の地域社会は, 挨拶や相談などの軽い関係として活発だが, ネットワークとして捉えていない可能性があるだろう。

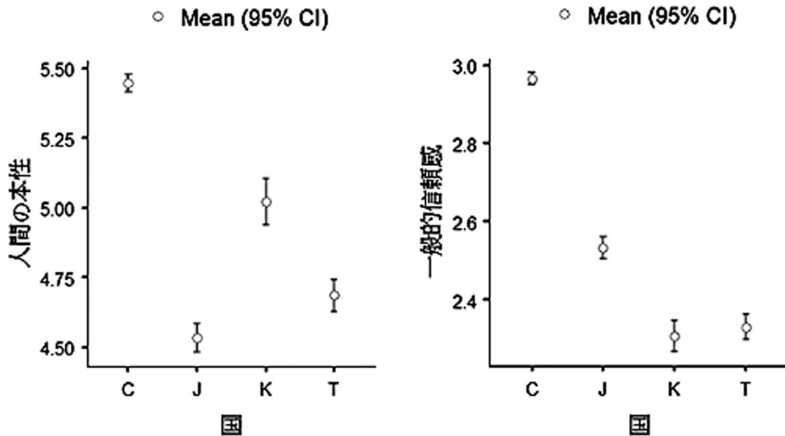
#### ◎信頼感の指標

信頼感の指標としての結果は Figure 3 に示す。【人間の本性】は  $F(3,3947) = 377.5, p < .001$ , 4カ国に差がある。中国は人間の本性が善だと思える人が多いが, 日本は人間の本性が悪だと思える人が多い。【一般的信頼感】は  $F(3,3962) = 685.1, p < .001$ , 韓国台湾に差無し, 中国のみ信頼感が高い。



(注2) 心理的距離の指標の標準偏差などの数値はVI巻末資料である。

Figure 2 ネットワーク獲得経験(外食時), 地域挨拶人数, 地域相談人数, 地域協力関係, 地域配慮関係



(注3) 信頼感の指標の標準偏差などの数値はVI巻末資料である。

Figure 3 人間の本性, 一般的信頼感

全体として、中国が突出して一般的信頼感が高く、台湾が低い傾向がある。山岸の研究で見いだされた。米国における一般的信頼感が高い傾向と通ずるものがあるようである。安心安全社会ではなく、信頼できない相手とも付き合わざるをえないからこそその一般的信頼感だろう。

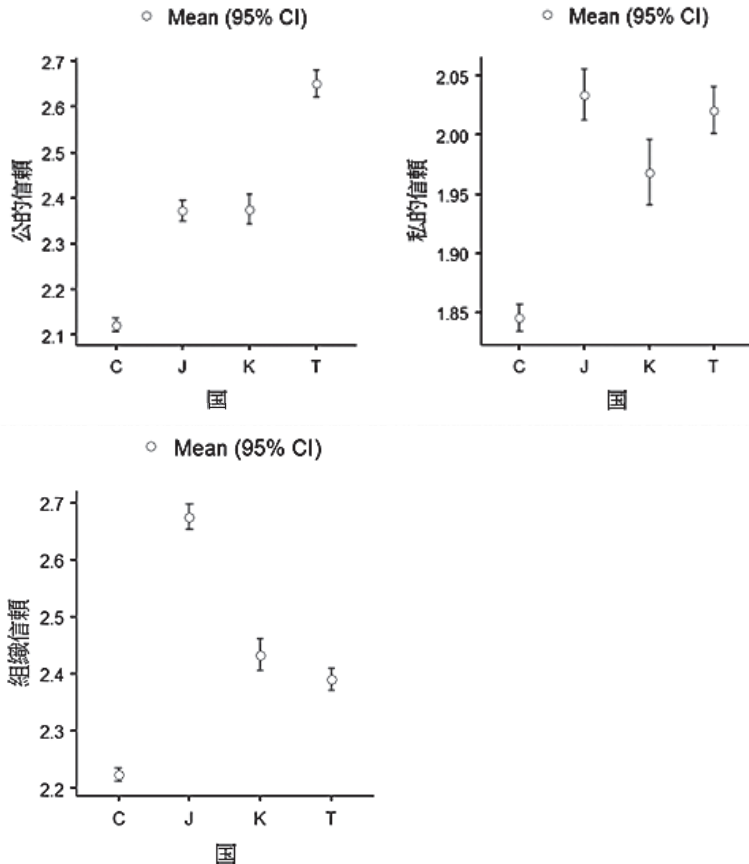
#### ◎社会的カテゴリーに対する信頼感

社会的カテゴリーに対する信頼感3因子(公的信頼, 私的信頼, 組織信頼)との4カ国に分析した結果は Figure 4 に示す。【公的信頼】は  $F(3,3799) = 382, p < .001$ , 日本と韓国に差なし, 中国が高い。【私的信頼】は  $F(3,3764) = 125, p < .001$ , 中国のみ低い。【組織信頼】は  $F(3,3724) = 431, p < .001$ , 日本が一番高い, 韓国と台湾に差がない, 中国が低い。

一般的信頼感とは逆に、職業カテゴリーごとの信頼感は、中国が突出して低く、日本が高い。私的な関係に対する信頼は、韓国, 台湾ともに高い。

#### ◎開放的ネットワーク指標

閉鎖的,あるいは開放的なネットワークの定義として、知り合いの中にどれだけ多くの職業の人がいるかをカウントする職業ネットワーク項目を

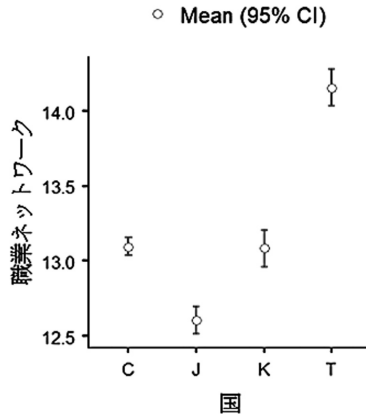


(注4) 社会的カテゴリーに対する信頼感の標準偏差などの数値はVI巻末資料である。

Figure 4 公的信頼, 私的信頼, 組織信頼

用いる。職業ネットワークを用いる。この項目について4カ国との一元配置分散分析した結果を Figure 5 に示す。F(3,4099) = 132,  $p < .001$ , 中国と韓国に差がない, 台湾はもっとも職業ネットワークが広く。日本がもっとも狭い。

この結果から, 台湾は開放的ネットワーク, 日本は閉鎖的ネットワーク,



(注5) 職業ネットワークの標準偏差などの数値はVI巻末資料である。

Figure 5 職業ネットワーク

中国と韓国はその中間と位置づけられる。

### 2-2-3. 回帰分析

#### ◎対人ネットワークを広げる組織

従開放的ネットワーク指標に影響を与える要因について、探索的な分析を行った。従属変数は職業ネットワーク、独立変数は組織参加【政治団体 地縁組織 ボランティア 市民の会 宗教団体 同窓会 スポーツクラブ 労働組合 専門職団体】の変数である。どんな組織を通じて人の対人ネットワークが広がるのだろうかを確認する分析である(結果を Table 3 に示す)。

モデルの説明力のは  $R^2 = .069$ 、であった地縁組織と市民の会のネットワークは .071 と -.026 と、所属することによって、むしろネットワークを狭める方向に働く。一方、専門職団体、ボランティアのネットワークは .109 と .100 で、九つの組織の中でもネットワークを広げる影響力が強い団体である。残りの労働組合、政治団体、スポーツクラブ、同窓会、宗教団体も、対人ネットワークを広げることに多少寄与する。日本と韓国は、比較的、組織参加によるネットワークの広がりが少ない。



対人ネットワークと心理的距離が異文化適応に及ぼす影響

Tabele 3 対人ネットワークを広げる組織の表  
Model Coefficients - 職業ネットワーク

	日 本	台 湾	中 国	韓 国	全 体
Predictor	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
Intercept					
政治団体	.034	.046*	.068***	-.018	.067***
地縁組織	.047*	.033	.004	-.042	-.071***
ボランティア	.051*	.094***	.052***	.140***	.100***
市民の会	.002	.027	-.029*	.036	-.026**
宗教団体	.037	.101***	.008	.042	.043***
同窓会	.133***	.043*	.130***	.138***	.045***
スポーツクラブ	.101***	.113***	.086***	.128	.078***
労働組合	.019	.013	.119***	.025	.079***
専門職団体	.150***	.078***	.087***	.096***	.109***
	R <sup>2</sup> = .094 N = 2060	R <sup>2</sup> = .068 N = 2090	R <sup>2</sup> = .107 N = 5720	R <sup>2</sup> = .127 N = 1396	R <sup>2</sup> = .069 N = 11266

Note. \* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

次に、同じ回帰分析を国別に行った。4カ国に共通して、ネットワークを広げる組織は、ボランティア、同窓会、スポーツクラブ、専門職団体である。その他の組織については4カ国に差異がみられた。日本は専門職団体が強い、地縁組織、同窓会が対人ネットワークを広げる。台湾は宗教団体が強く、同窓会が弱い。政治団体も多少広げるのである。中国は労働組合強い、政治団体、市民の会が可能である。韓国はボランティアが強く他は少ない。

全体として、各国内で、多くの人が所属している、あるいは所属していない組織ではなく、所属している人もいればしていない人もいるような団体に、ネットワークの多様性を広げる影響力が見られる。一方で、国内では違いがないが国際的に差があるような組織では、国別比較ではあまり影響力が見いだされていなくても、4カ国全体として影響力が見いだされる団体もある。

◎対人ネットワークを広げる特徴

従属変数は職業ネットワーク，独立変数はネットワークが広げる特徴【組織参加，同質性，会話独占(外食時)，地域援助関係，組織参加，海外居住知人，外国人知人，外食頻度(家族以外)，地位配慮(外食時)，地域相談人数，地位配慮無用，教育問題会話】である(結果は Table 4 に示す)。

結果は  $R^2 = .242$ ，全体の結果は，教育問題会話，外国人知人，海外居住知人が最も対人ネットワークを大きく広げる。そして，地位配慮(外食時)，地域相談人数，外食頻度(家族以外)も広げることができる。また，広げる特徴の中で特に注目すべきは同質性である。組織内の同質性認知が高いほど，ネットワークの開放性が低くなる。地域の助け合い関係は，国別の差が大きいのに比べて，国内の差異が小さいため，全体の効果のみ出ている。

Table 4 対人ネットワークを広げる特徴の表  
Model Coefficients - 職業ネットワーク

	日 本	台 湾	中 国	韓 国	全 体
Predictor	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
Intercept					
会話独占(外食時)	-.018	.036	.051**	.061*	.051**
地域援助関係	-.010	-.008	.000	.032	.069***
組織参加	.093***	.073*	.106***	.154***	.053***
海外居住知人	.118***	.128***	.135***	.241***	.148***
外国人知人	.199***	.209***	.103***	.104***	.187***
外食頻度(家族以外)	.132***	.106	.181***	.072**	.120***
地位配慮(外食時)	.111***	.072**	.074***	.050	.110***
地域相談人数	.077**	.139***	.016	.114***	.124***
地位配慮無用	.111***	.047*	.063***	.037	.059***
教育問題会話	.072**	.186***	.165***	.112***	.197***
同質性	-.083**	-.064	-.070**	-.023	-.021
	$R^2 = .220$ N = 1572	$R^2 = .226$ N = 1477	$R^2 = .217$ N = 3267	$R^2 = .214$ N = 1163	$R^2 = .245$ N = 3432

Note. \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

国別の結果は、海外居住知人、外国人知人、外食頻度(家族以外)、教育問題会話の特徴は4カ国に対して対人ネットワークを広げる特徴である。日本は外国人知人が強い、地位配慮(外食時)、地位配慮無用も広げる可能な特徴で、集団内同質性が高いほど下がる。台湾は外国人の知人数が一番高い、地域相談人数も広げる可能な特徴である。中国は外食頻度(家族以外)が高い、集団内同質性も日本と同じに高いほど下がる。韓国は海外に居住する知人が強い、組織参加、地域相談人数も広げる可能な特徴である。

全体として、海外に居住している知人がいるかどうか、外国に知人を持っているかどうかは職業ネットワークの多様性を広げるもっとも大きな特徴になっており、これは4カ国に共通している。

## 2-3. 考 察

### 2-3-1. 4カ国の対人ネットワークについて

信頼感の因子分析の結果はEASSでの4カ国の社会的カテゴリーに対する信頼感から公的信頼、組織信頼、私的信頼の3因子を得た。その3因子は信頼感の指標の一部で、社会的カテゴリーに対する信頼感である。

4カ国の比較での結果は対人ネットワークの指標、心理的距離の指標、信頼感の指標について4カ国の平均値を比較したところ、対人ネットワークの指標では台湾が高く、中国が低い。心理的距離の指標では中国の心理的距離が近く、日本の心理的距離が遠い。信頼感の指標では人間の本性と一般的信頼は中国が高い、社会的カテゴリーに対する信頼感は日本と台湾の信頼感が高く、中国が最も信頼感が低くなっている。日本は特に組織信頼が最も高くなっている。また、各職業と交流する程度の高さ(職業ネットワーク)は台湾が最も高く、中国と韓国はほぼ同じで、日本が最も低い。したがって、日本のネットワークは閉鎖的で、中国と台湾のネットワークは開放的であるといえる。

以上の結果から、本研究の仮説は支持された。日本の対人ネットワークは中国、台湾、韓国の3カ国と比べては閉鎖的で、心理的距離は遠く、信

頼感も低い。しかし、社会カテゴリーに対する信頼感での組織についての信頼はとても高い。山岸が安心社会という日本は集団外の他人に対する信頼度が低いことを示したが、他人に対する不信感だけが日本において「安心社会」に代わる「信頼社会」への移行を難しくしているわけではない。多言語、多文化社会で経験のある人は多くないばかりか、そのような経験があっても同質志向の日本社会では、組織決定に関わる中心的な役割を担うことはできず、多くは外部との関係の架け橋としてだけになり、外部の人との信頼関係の確立には貢献できない状況がある。したがって、外部の人との信頼関係の確立が難しい状況がある日本人は本研究に見られた信頼感の指標との結果と一貫した結果が見いだされた。各職業と交流する程度が一番低い日本はある程度に信頼感を持つとき、各職業と交流する回数が高くなるといえる。日本人は集団外の他人に対する信頼度が作らないということではなく、ある程度の時間、信頼できるきっかけなどの必要があるのである。

心理的距離を従属変数とした分析によれば中国は外食時にネットワークを広げる。一方、台湾、韓国、日本は外食時のネットワークを広げる機会があっても、新しいネットワークを受け入れない。地域での隣人、住民に挨拶、協力関係、配慮関係については中国がもっとも密接な地域社会を構成しており、日本が最も低い傾向にある。

### 2-3-2. 適応の国差

4カ国それぞれにとっての外国人が各国に移住しようとした場合、どうすれば異文化適応に成功できるだろうか。本研究では、その点を探るために、4カ国の対人ネットワークを広げる組織と特徴を分析した。対人ネットワークを広げる組織及び特徴を変数に回帰分析を行った結果、4カ国の文化の差異、考え方の差異、教育の差異が示された。対人ネットワークを広げる組織として4カ国に共通する組織はボランティア、同窓会、スポーツクラブ、専門職団体である。一方、差異から見えてところの、外国人がネットワークを広げて適応するために推奨される組織は、次の通りであっ

た。日本に行く場合は地縁組織と同窓会，台湾に行くなら宗教団体と政治団体，中国に行くなら労働組合と政治団体と市民の会，韓国に行くならボランティア団体に所属すれば，ネットワークを広げられる可能性が高い。このような結果になる背景を考察する。一部の組織については，メディアを通じて異文化間の感覚の違いを垣間見ることができる。例えば，同窓会という組織は日本のドラマやTwitterに示される日本人にとってのイメージは，昔の親しい友達やクラスメートと交流する楽しい組織だが，台湾・韓国・中国のドラマやビデオ(YoutubeとTiktok)に示されるイメージは仕事，結婚，近況などを比較して，ひけらかす場所である。宗教団体については，異なる文化基礎がある。台湾にとっては子供の時からお正月，盂蘭盆，周りに説明できない現象などを説明しようとする時，「道教」という長い歴史がある宗教に行き着く。すなわち「信仰」である。日本にとっての「宗教」は神社などの「生活」と接するところに存在する。ところが宗教団体に対しては，そのような「宗教」とは異なる，外来宗教の感覚が持たれている。韓国にとっての宗教団体のイメージは「新天地」のような邪教に結びつけられやすい。中国の場合は特に，政治的原因により宗教団体についてのルールが厳しい。

対人ネットワークを広げる特徴として，4カ国が共通するのは海外居住知人，外国人知人，外食頻度(家族以外)，教育問題会話であった。この結果からわかるのは日本にとって組織に所属する人は信頼され，受け入れる程度が高い。組織内の同調性も高く，組織を通じて対人ネットワークを広げる。一方，台湾にとってはコミュニケーションが重要であることが示唆されている。外国人を知り合う時も，地域や近所の人を知り合う時も，会話量が少ないと，相手の価値観，興味などを了解できず，対人ネットワークを広げられない。一方，台湾派異文化を受け入れる程度が高く，各国の文化，アイドル，歌，ドラマ，食べ物，着る服，化粧品，など台湾からはアクセスしやすい。中国は外食頻度(家族以外)が高く，集団内同質性が高い結果から一緒に食事することが重要であることが示される。対人ネット

ワークは食事を通じて広げられる。韓国は海外に居住する韓国人や、友達を通じて対人ネットワークを広げる。

これらのネットワークを広げる特徴の中で特に注目すべきは同質性である。組織内の同質性認知が高いほど、ネットワークの開放性が低くなる。閉鎖的ネットワークの集団内での人間関係維持に、同質性が重要となっていることが示唆される。日本と中国は特に集団内同質性が高い。この集団同質性において日中が似ている結果は、日本のネットワークが閉鎖的で、中国のネットワークは開放的であった結果と矛盾するが、中国の開放的ネットワークは外部に繋がるリンクが多い一方で、内部も密接につながるスモールワールドネットワークを構成していると解釈される。

第1研究の結論として、日本、台湾、中国、韓国は対人ネットワークと心理的距離の違いがあり、ネットワーク拡張に必要な組織や習慣も異なる。これらは異文化適応に実際に、どのような影響を来日外国人にもたらしているだろうか。第2研究においては、実際の異文化適応過程についてインタビューを用いて、来日の台湾人と中国人、とそれを受け入れる日本人との対人ネットワークと心理的距離の違いから実際にどのような影響を持つかを検討する。

## Ⅲ 第2研究

### 3-1. 目 的

第1研究からは、実際の異文化適応過程について知ることはできない。インタビューにより来日外国人の異文化適応過程と、それを受け入れる日本人の異文化受容過程を探る。

### 3-2. 方 法

#### ◎インタビュー

調査対象者は日本人・台湾人・中国人である。台湾人と中国人の留学生

や日本に就職した社会人、と外国人と知り合った経験を持っている日本人である。年齢と性別との制限はない。募集方法はアジア人留学生、日本に就職した外国人と知り合った経験のある日本人を学校の先端ナビ掲示・社会心理学授業グループなどに掲示・個人的人脈を通じて募集した。インタビューする方法は、研究参加への同意、国籍、年齢、性別、職業やとEASSからの信頼感の指標の項目を Web 質問測定する。インタビューの内容は一年以内の対人ネットワーク図を描き、異文化交流の経験、友達の作り方などである。そして、コロナ禍のため、TeamsWeb 会議機能を用いて、音声会話による構造化面接法のインタビューとした。

本研究の調査対象者は外国人と知り合った経験がある日本人の学生や社会人は 4 人、台湾人の留学生や社会人は 4 人、中国人の留学生や社会人は 4 人である(男性は 6 名、女性は 6 名；年齢範囲は 20~40 歳、 $M = 25.58$ ,  $SD = 5.98$ )。

#### ◎テキスト分析

本研究では、語りの内容を分類するために、テキスト分析を用いた(曾秋, 2021)。ソフトウェアには MATLAB でのテキスト解析(Text Analytics Toolbox)を用いる。Text Analytics Toolbox には、テキストデータの前処理や解析、モデル化を行うためのアルゴリズムと可視化手法、Topic モデリングなどのプログラムが供されている。

本研究では、MATLAB が公開している Analyze Japanese Text Data のツールボックスの解説資料に従い、予測性能(Perplexity)、形態素解析、意味解析、Topic モデル、とのテキスト分析を行った。Topic モデルは確率モデルであるため、予測性能(Perplexity)を使う。形態素解析とは、トークン化アルゴリズムを使用して、生テキストを単語の集合に自動的に分割して、ストップワードの削除や句読点の削除など、前処理系の関数を用いて、有意な単語を生テキストから抽出する手法である。意味解析は Word Cloud を用いて行った。言葉は出現頻度が高いと、文字の大きさが大きく示す。本件空では品詞判別データに用いて token として名詞形容詞

動詞を中心に分析した。Topic モデルとしては、潜在的ディリクレ配分法 (LDA) 機械学習アルゴリズムを使用した。

### 3-2-1. 事前質問紙の構成

事前質問紙の項目はすべて日本語で記述されている。事前質問紙の①と②の部分はインタビューの同意書と個人情報である。③から⑥までの項目はEASSからの信頼感の指標の項目である。

### 3-2-2. 事前質問紙の項目

- ①研究参加への同意のお願い
- ②国籍, 性別, 年齢, 職業
- ③現在あなたは幸せですか? (非常に幸せ, 幸せ, まあまあ, 不幸せ, 非常に不幸せ)
- ④人間の本性は悪か善か? (本来は悪, 2, 3, 4, 5, 6, 本来は善)
- ⑤次にあげる人(社会的カテゴリー)について, どのぐらい信頼していますか? (とても信頼している, ある程度信頼している, あまり信頼していない, まったく信頼していない)
- ⑥一般的に, 人は信用できるか? (ほとんどの場合, 信用できる, たいていは, 信用できる, たいていは, 用心したほうがよい, ほとんどの場合, 用心したほうがよい)

### 3-3. インタビューの構成

インタビューの項目は日本語と中国語で記述されている。インタビューの項目の構成は自分の留学生としての経験, 指導先生と討論するネットワークを広げる時によくあること, の方面から, インタビューの項目を構成した。

#### 3-3-1. インタビューの項目

- ①外国人と友達になる前に, どんな想像や期待があったか?
- ②その想像と比べて, 実際に知り合った印象はどうだったか?
- ③仲のよい友達になるまでに時間はどのぐらいかかったか?



- ④外国人友達と本国友達のいい点と悪い点を一つずつ挙げてください。
- ⑤どんなネットワークを通じて友達になるか？一番重要だと思うネットワークは何か？(学校, アルバイト, 近所の人など…)
- ⑥長い友情を続けたければ, どんなことをお互いに注意すべきか？そのために, どんな行動をするか？
- ⑦もし何か困難や相談などがあつたら, 誰と話したいか？

### 3-4. 結 果

#### 3-4-1. インタビューの結果

問1「外国人と友達になる前に, どんな想像や期待があつたか？」

日本人の回答：おおよそ半分の人たちは, 自分から外国人に働きかけた経験はなく, 学校やサークルなどで外国人と知り合つて, その前に, 外国人と友達になることを想像したり期待したことがない。外国に対するイメージは, ニュースや観光客などによって作られる。残りの半数のたちは実際似コミュニケーションした経験から理解したり, 元々親日なイメージを持っている国については, よくその国に関する情報を調査し, 遊びに行くといった考えを持っている。

台湾人の回答：日本人はマナーがいい, 優しい, 丁寧な態度, 表裏があるなどの性格についてのイメージがある。そして, 日本に対する期待感が非常に高い, テレビやネットなどのメディアから日本の風景, 食べ物などをよく見ており, ワクワクとした気持ちを持っている。

中国人の回答：おおよそ半数の人たちがアニメを原因として, 日本に興味が生じて, 日本語を勉強する。アニメから生じるゲーム, 映画に接触しながら, イメージを作る人が多い。残りの半分は自分の国のシステムが原因で, 日本は中国と比べてもっと自由だという想像がある。例えば, 自由にユーチューブなどのメディアを見ることができからである。そして, 日本人に対する想像は礼儀正しいこと, 繊細で, 用心深い性格, きれいにする習慣があること, 真面目な人が多いからスト

レスがよくたまる雰囲気があることを挙げている。

まとめると、目立つのは、台湾人と中国人は来日時の経験である。本研究の場合、留学のために来日しているので、自分の見聞を広めたいこと、独立の力を持ちたいこと、挑戦的なことをすること、日本の友達に作りたいたいなどの回答であった。一步追う、日本人は、来日外国人の受け入れ経験から答えており、留学者には限らない外国人と接触経験から回答している。他国への適応の必要性がないためか、外国人と友達になりたいと考えておらず、自分から外国人と知り合いたいと考える者は少ない。したがって、日本人は機会があれば外国人と知り会うが、なくても影響がない場合がほとんどである。しかし、留学経験を持っている日本人とお年寄りの日本人はそうした場合でも、外国人と知り合う時、受け入れやすく、外国人が日本に適應することを手助けするということが分かった。

問2「その想像と比べて、実際に知り合った印象はどうだったか？」

日本人の回答：知り合った外国人は中国人が多い、台湾人は少ないがいる。

学校、サークルのネットワークを通じて、外国人と知り合う。半分の日本人の回答は実際に感じた外国人と想像した外国人はあまり変わらないと思う。他方は使う言葉の差異があると答えている。例えば、相手から謝られたら日本人やったら「いい」、外国人は「大丈夫」と言う。それから、遊びに行く時感じたこと、台湾の場合は暑い、純粋な人が多い、日本人だって言ったらサービスしてくれること、風景がきれいななどの良いイメージである。中国は空気が悪いとの回答が多い。

台湾人の回答：日本人はマナーがいいが、良すぎて、逆に無礼になってしまうと感じている。表向きは礼儀正しいし、どこから来たって質問もあるし、LINEの友達にもなる。しかし、時間が経つと、いつもと同様な礼儀で距離感を感じて、何回も同じの質問していて、ただの社交辞令だという感じである。特に若い日本人からそんな距離感を感じやすい。したがって、留学生として日本にいるより、観光客として日本

に旅行する方がいいと思う人が多い。それから、日本に来て影響されたことは出かける時に絶対化粧すること、お風呂が好きになることである。

中国人の回答：中国より自由だと感じる。実際に接すると、想像と違うことがある。例えば、距離感があること、友達を作る方法が違うこと、表裏があること、日本のニュースでのネガティブは実際に接触した日本人は否定的な感情のような考え方を持っていないが違いがあること、中国より生活の便利さは便利ではないことなど。

第2問から、日本人と台湾人と中国人との距離感の違いが示されている。これらの違いは、第1研究に見られた4カ国と心理的距離の指標との結果と一貫している。

問3「仲のよい友達になるまでに時間はどのぐらいかかったか？」

日本人の回答：長い時間を必要とする人の場合は2、3年から5、6年、短い時間で良い人は、1日、すぐできる時もある。その相手は日本人にしても外国人にしても同じである。価値観や性格の合い、お互いに考える気持ちなどがあればできる。

台湾人の回答：半分以上の人たちは時間の問題ではないと答えている。共通のところ、興味とか、価値観が合えば、ほとんどすぐできる。残り1人だけ短いのは2か月、長いのは1年くらい時間がかかる。

中国人の回答：日本人と中国人では友達になる時間は違いがあると回答している。日本人と友達になる時間は、1か月、半年ぐらいの時間が必要である。本国の人と友達になる時間はすぐできる人もいるし、3日ぐらい人もいるし、長い時間をかけるタイプ人は1、2か月ぐらいもある。

第3問の結果は、3カ国の人たちの友達になれる条件に差異がない一方で、友達になる時間の差がとても大きいことである。日本人は長い時間をかけて、相手と友達になる価値、必要があるかを確認する。台湾人と中国

人は短い時間をかけて、友達として相手を理解して、本当にお互いのいろんなことが合うなら、ずっと友達になれる。

問4 「外国人友達と本国友達のいい点と悪い点を一つずつ挙げてください」

日本人の回答：言語の壁についての言及がほとんどであった。意味の伝え間違い、単語の使い方の違い、日本語特有のスラングを話しづらい、敬語とタメ語の使い分け、などの言語からの困難がある。そして、外国人の人に比べて簡単に日本人の友達に悪口などを言ったりしやすい。逆に、意見や行動が違ってても外国人だったならば違う環境だったし、そういう考え方もあるのかなと納得することもあるようだ。日本人の友達に対する方が、考え方に賛同できないと感じやすい。

台湾人の回答：やはり言語に関わる。台湾人の友達はうまく会話ができて、冗談や、ネタなどを言う時、すぐわかる。外国人なら、ネタの説明が必要で、雰囲気は恥ずかしくなる。しかし、台湾人の友達は言葉が通じるから、どんなことでも聞き取りやすいし、悪い言葉をよく使うことがある。外国人の友達がいると、国際的だと感じ、いろいろな人たちと知り合うという感じがある。中国人の友達なら、素直の部分、単純という感じがいいが、素直すぎるという悪い点もある。日本人の友達は仕事の態度がいいが、少し偉そうな感じをしているところ、意見が違うといじめなどがある。

中国人の回答：同じように、ほとんどが言語の問題となる。中国人なら、同じの国だから、ある話題を話すとき、わかりやすい、便利である。外国人なら、ある意味を通じる過程が難しい。そして、日本人の友達は自分の個人的な希望を尊重できること、個人の空間を持っている感じがある。しかし、欠点は距離感がある。中国の友達はよくなれなれしすぎる時がある。突然出会うとか、親しみにする行動をする。日本人はもしグループでパーティーをするなら、先に約束しなければなら

ない、など。非常に柔軟な方法だが、非常に形式的である。

第4問からわかるのは異文化適応する時、言語から生じる誤解、意味不明などの影響が最も大きく、コミュニケーションが重要であることがわかる。他の国の言語を使う人と聞く人とのコミュニケーションする時は根気よく説明する必要がある、言葉を尽くすことが一番である。相互理解ができない理由は、コミュニケーション能力の基礎となる基礎知識や常識が欠けていることが原因で、異文化交流の十分な実践経験のない学生に取っては思うようにできないと感じられている。異なる文化を調節するためには、言語の運用能力だけでなく、状況把握の能力、感情を伝える力、基礎知識なども身につけなければならない。「察し」のコミュニケーションから「語る」を重んじる国際社会は、どのような能力が必要なのかを知る手がかりだと思われる。

問5 「どんなネットワークを通じて友達になるか？一番重要だと思うネットワークは何か？」

この回答は、国籍によらずほとんど似ていた。日本人と台湾人と中国人の回答はほとんど家族と友達が一番重要なネットワークである。友達は特に大学と高校時代のネットワークである。もうすぐ社会人になる年齢で、同じの悩みや困難があるから、お互いに気持ちがよくわかるから。少数の回答として、日本人のある一人だけは小学校時代の友達と回答した。そして、中国人のある二人は「私」と回答した。自分がないと、友達もないからと説明している。

第5問から、家族と学生時代から知り合った友達は日本人と台湾人に対して、欠かせないネットワークであることがわかる。

問6 「長い友情を続けたければ、どんなことをお互いに注意すべきか？  
そのために、どんな行動をするか？」

日本人の回答：一緒に過ごす時間を増やすこと、下品な話はやめること、

相手の趣味とか、興味関心が自分と少しずれている友達だったなら、できるだけ相手に合わせて話してあげること、相手を思う気持ちと回答した。

台湾人の回答：お互いに尊重し合う、互いに理解し合っていること、人として最低ラインがあるから、それをわざと触らないこと、話題がないと、繋がらないから話題があること、一緒に過ごす時間があることである。

中国人の回答：お互いに相手の立場から考えること、お互いを尊重すること、真剣すぎる話題(政治など)を話さなく、趣味などで頻繁にコミュニケーションをとったり、定期的なコミュニケーションを保証したりすること、お互いの反応や心情を注意して、不満や軽蔑などを言い捨てることをしないことである。

第6問から見える日本人の考え方は「私」がこうすれば関係が長くなる。台湾人と中国人の考え方は「お互い」にこうすれば関係が長くなるという、考え方の違いである。これも日本の「迷惑文化」の影響かもしれない。第1研究の心理的距離が遠いという結果の日本は「人に迷惑をかけてはいけない」と「他人への配慮」を子供の時から覚えていく。意見や趣味が違って、合わせて話してあげるといふ配慮がある。

問7「もし何か困難や相談などがあつたら、誰と話したいか？」

この問いについても、国籍の違いがほとんど見られず、友達と回答している。大きなこと(お金が足りないことや心配しないことなど)は家族、親に相談する。小さなこと(文献、日常の文句、服など)は友達である。少数の回答として、自分で解決する人は台湾人が一人、中国人が二人である。その台湾人は自分で解決した後、友達に文句を言うタイプである。中国人は自分で解決するのが好きである。しかし、感情のことなら異性の友達に相談する。日本人の一人は知り合いの臨床心理士の方と回答して、専門だからではなくて、その人自身を友人として信頼していると説明した。

第7問からどの国の人でも、家族や友達はかけがえのない存在であることがわかる。自分で解決する人たちは他の人の意見に自分の考えを影響されたくないと考えている。他人の意見や相談を受ても、その意見に従わない可能性があり、その人がかかった時間や私のための気持ちに対して無駄になる気持ちがある。したがって、解決してから、文句やその時の気持ちなどを友達に話す方が良いとする考え方が示されている。

### 3-4-2. テキスト分析

日台中の12人の7問のインタビューはMATLABで分析し、インタビューの中での言葉、よく使う単語、言い方などの出現頻度、共起確率によりテキスト分析を行った。

3カ国・7問のインタビュー全てのテキストを対象にTopicモデルを適用する。Figure 6の図は青い線(validation perplexity)評価指標として、予測性能(Perplexity)を最大化するTopic数を探索したところ9個が最適であった。予測性能(Perplexity)は250.4752である。

すべての7問のインタビューを九つのTopicで分析し、中での言葉は出現頻度が高いと、文字の大きさが大きく示す。そこで品詞判別データをtdetailsという変数に入れ、そこからワードクラウドを出してtokenに入

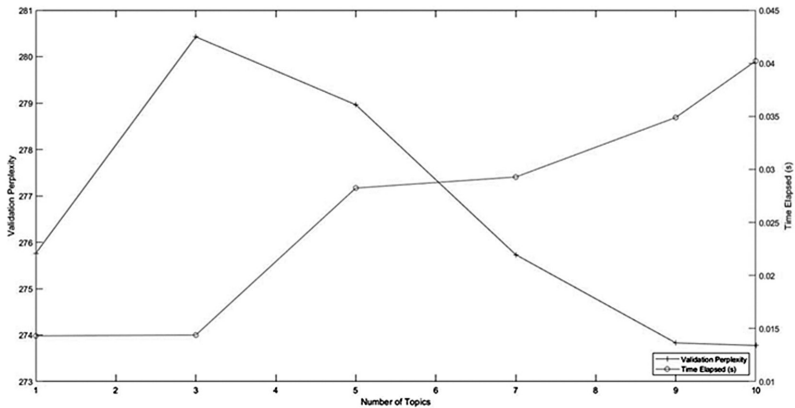


Figure 6 Topic モデル



Figure 7 ワードクラウド

れると、わかりやすく結果を表示する (Figure 7 に示す)。インタビューの内容は異文化適応に関することであるが、日本を中心として在日する経験外国人と日本人との異文化適応なので、よく使う単語は「日本人」、「友達」、「連絡」、「外国」、「実際」、「中国」、「台湾」などである。それから、インタビューはインタビューイが感じる事、思うことなどを主観的なことを聞くので、「思う」、「言う」、「知る」、「考える」などの単語をよく出ている。そして、「印象」、「理解」、「距離」、「実際」、「接触」、「違う」などの単語は人と人の中に関係の中に感じられることや、変われることを示している。そして、Topic 1 は人間関係の維持 (Maintain relationships), Topic 2 はポジティブ感情表現 (Positive expression), Topic 3 は異文化適応 (Adaptation), Topic 4 は日本の印象 (Japan Impression), Topic 5 は来日の経験 (Experience in Japan), Topic 6 はネットワーク参加 (Network), Topic 7 は中国の印象 (China Impression), Topic 8 は台湾の印象 (Taiwan Impression), Topic 9 は親密な対人関係 (Intimate relationship) である。

日本、台湾、中国のインタビューを九つの Topic で分析し、一つの会話文に各話題がどの程度含まれているのかを算出した。Figure 8 は、最



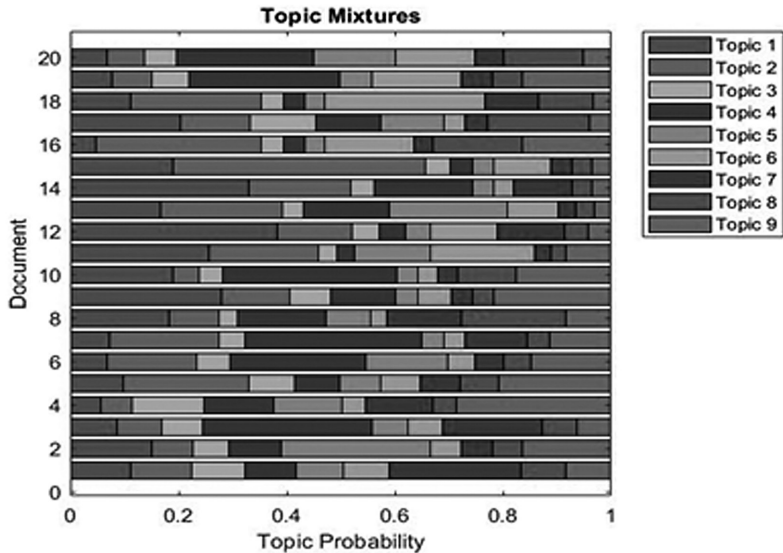


Figure 8 各会話文に含まれる九つの Topic 度

初の20行の例である。

0行から20行のドキュメントに分布が高いのは Topic 1 人間関係の維持, Topic 2 ポジティブ感情表現, Topic 9 親密な対人関係である。三つの Topic は「学校, 興味, 伝える, 続ける, 話せる, 友情, 言語, 想像, 良い, 政治, 感情, 個人, 文化, 趣味, 感じる, 友人, 幸せ, 状況」などの単語が持って, それは異文化適応する時, 関わることで, 友達になる過程や続きに対する重要なものを示す。

各 Topic に対して国, 質問, ランダム要因として, 人をいれた混合モデル分析を行った。九つの Topic のうち国による影響が認められた Topic は, 1 は台湾, 2 は日本, 3 は中国と示して, 各国の差異を見る。

Topic 1 人間関係の維持 (Maintain relationships) に対する国の効果は  $F(2,8.98) = 2.67, p = .123$ 。影響は認められなかった。Topic 2 ポジティブ感情表現 (Positive expression) に対する国の効果は  $F(2,9.40) = 1.338, p =$

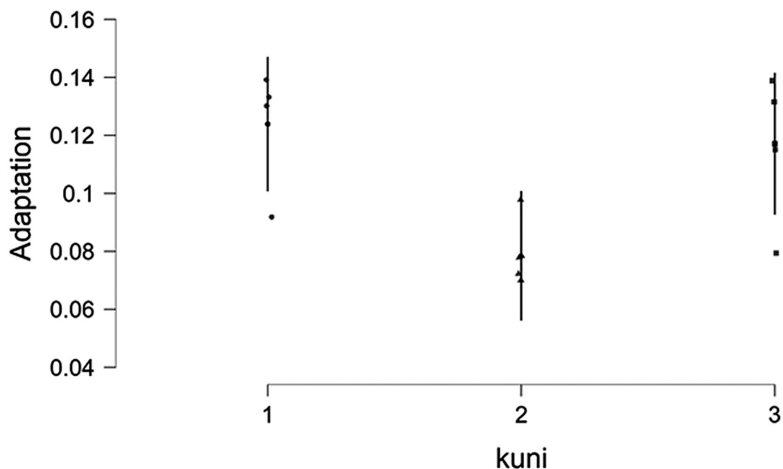


Figure 9 異文化適応 (Adaptation)

.308。影響は認められなかった。Topic 3 異文化適応 (Adaptation) に対する国の効果は  $F(2, 7.48) = 6.504, p = .023$ 。有意な効果が認められた (Figure 9 に示す)。台湾と中国は異文化適応の Topic 数が高い，異文化適応の経験がたくさんあると示し，日本は低いいため，少ないと示す。

Topic 4 日本の印象 (Japan Impression) に対する国の効果は  $F(2, 8.39) = 5.313, p = .032$ 。有意な効果が認められた (Figure 10 に示す)。日本の印象のため，台湾と中国の Topic 数が高い，日本は低い。そして，台湾より中国の方が高い。

Topic 5 来日の経験 (Experience in Japan) に対する国の効果は  $F(2, 16.08) = .844, p = .448$ 。影響は認められなかった。Topic 6 ネットワーク参加 (Network) に対する国の効果は  $F(2, 9.23) = 2.711, p = .118$ 。影響は認められなかった。Topic 7 中国の印象 (China Impression) に対する国の効果は  $F(2, 8.04) = 24.521, p < .001$ 。有意な効果が認められた (Figure 11 に示す)。Figure 15 を見ると，日本は中国の印象の Topic 数が一番高い，日本人が知り合った外国人はほとんど中国人と示す。

対人ネットワークと心理的距離が異文化適応に及ぼす影響

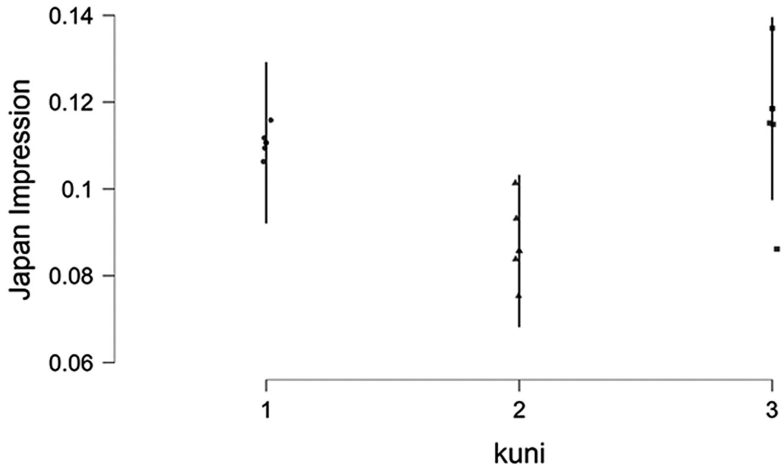


Figure 10 日本の印象(Japan Impression)

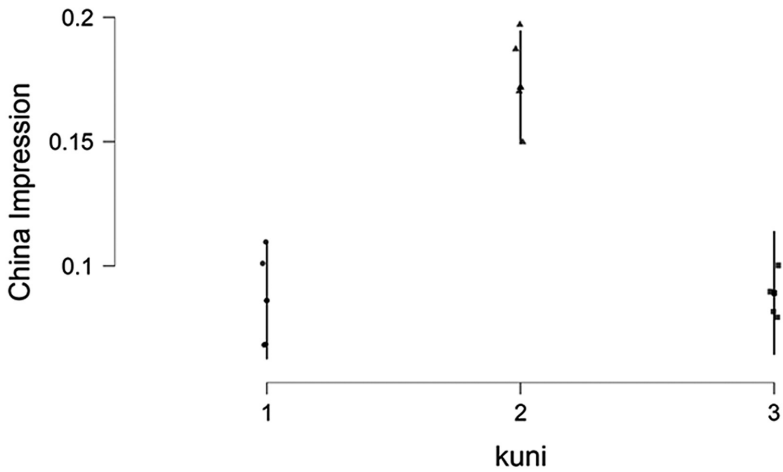


Figure 11 中国の印象(China Impression)

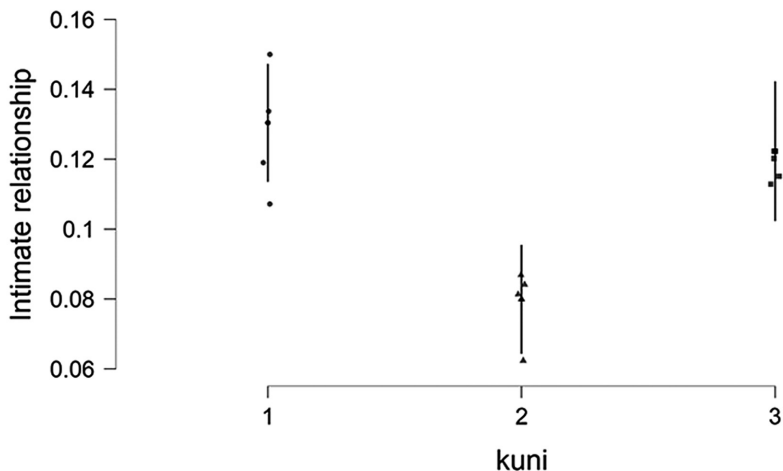


Figure 12 親密な対人関係(Intimate relationship)

Topic 8 台湾の印象(Taiwan Impression)に対する国の効果は  $F(2,8.08) = 1.801, p = .226$ 。影響は認められなかった。Topic 9 親密な対人関係(Intimate relationship)に対する国の効果は  $F(2,15.03) = 17.652, p < .001$ 。有意な効果が認められた(Figure 12 に示す)。親密な対人関係の Topic 数が高いのは台湾と中国である。Topic 数が高いと、親密な対人関係のある対象が多いと示す。

### 3-5. 考 察

#### 3-5-1. インタビュー

インタビューから伺える、日本人の心理的距離は第1研究に見られた4カ国と心理的距離の指標との結果と一貫している。日本人の心理的距離は台湾人と中国人より遠い、「人に迷惑をかけてはいけない」のような距離感。日本人の礼儀の中に、生活の中で、子供の時から感化を受けて知らず知らずのうちに存在している規範がインタビューにも現れていた。興味深い結果として、友達になれる条件に違いはないにもかかわらず、友達にな

る時間の差に3カ国の差異が見られている。日本人は長い時間をかけて、相手と友達になる価値、必要があるかを確認するが、台湾人と中国人は比較的短期間で友人関係を結ぶ。中国語には「日久見人心」の言葉がある。意味は「日がたてば人の心が分かる」である。これは、信用できるか否かに時間をかける必要があることを示唆する一方で、信用できないとなれば関係を切る必要もあることを示している。このように考えると、日本人と台湾人と中国人で友達の作り方は同じであるが、方法が違うのだと考察される。異なる文化を調節するためには、言語の運用能力だけでなく、状況把握の能力、感情を伝える力、基礎知識なども身につけなければならない。「察し」のコミュニケーションから「語る」を重んじる国際社会は、どのような能力が必要なのかを知る手がかりだと思われる。中国人にとってのネットワークからは「自分自身もネットワークの一つだ」という考えが浮かぶ。自分を中心にネットワークを作り、使って、その過程で自分のことを理解することができていく。これは、どの国の人にとっても同じであり、いろんなネットワークをし続けたり、変更したりする過程から、未知なる自己を少しずつ理解できるだろう。

### 3-5-2. テキスト分析

すべての7問のインタビューを九つの Topic で分析した結果として、日本にいる人の異文化経験が見えてきた。それは Topic 1 人間関係の維持、Topic 2 はポジティブ感情表現、Topic 3 は異文化適応、Topic 4 は日本の印象、Topic 5 は来日の経験、Topic 6 はネットワーク参加、Topic 7 は中国の印象、Topic 8 は台湾の印象、Topic 9 は親密な対人関係である。そして、一つの会話文に各話題がどの程度含まれているのかを算出して、0行から20行のドキュメントに分布が高いのは Topic 1 人間関係の維持、Topic 2 ポジティブ感情表現、Topic 9 親密な対人関係である。この三つの Topic は対人ネットワークの広げる特徴、続き方などに関わるものである。

それから、各 Topic に対して国、質問、ランダム要因として、人をい

れた混合モデル分析を行った結果は、Topic 3 異文化適応、Topic 4 日本の印象、Topic 7 中国の印象、Topic 9 親密な対人関係の四つ Topic が有意な効果がある。Topic 3 異文化適応は台湾と中国は Topic 数が高い、異文化適応の経験がたくさんあると示し、日本は低いと示す。日本の異文化適応の経験が少ない原因は今回インタビューした日本人が外国人を受け入れるか助けあげるかという場合なので、異文化適応より異文化を感じる方が多い。Topic 4 日本の印象は台湾と中国の Topic 数が高い、日本は低い。それはもちろんの結果である。日本を想像した印象と実際に接触した印象は外国人としての台湾人と中国人の方が感じやすい。そして、異文化適応する時、印象の変わる過程がその印象が頭に深くなる。Topic 7 中国の印象は日本の Topic 数が一番高い、日本人が知り合った外国人はほとんど中国人と示す。Topic 8 台湾の印象は中国人は少し高いと示したが、日本人が一番低い。したがって、本研究での日本人たちの外国人友達ほとんど中国人である。外国人留学生在籍状況調査によると、2020年5月1日現在の外国人留学生数は279,597人である。留学生数の多い国・地域は中国121,845人、ベトナム62,233人、ネパール24,002人、韓国15,785人、台湾7,088人である(文部科学省, 2020)。日本に留学する一番多い国は中国で、日本人がよく接触できる外国人は中国人という結果が当たり前である。Topic 9 親密な対人関係は台湾と中国の Topic 数が高い、日本は低い。その親密な対人関係は異文化での親密な対人関係である。第1研究の心理的距離の結果で日本人の心理的距離が台湾と中国と比べて遠いと示し、第2研究のインタビューの第3問で仲のよい友達になるまでに時間はどのくらいかかったかの結果で日本人が一番長い時間が必要ある。したがって、日本人に対しては、異文化間の親密な対人関係は言語の壁などの困難があつて、必要な時間はもっとかかるだろう。

#### IV 総合考察

本研究では、日本で留学生や海外に就職した東アジアの外国人が異文化に適応する過程において、日本、台湾、中国及び韓国の各文化圏における対人ネットワーク形成傾向がどのように影響するかを検討した。第1研究では日本、台湾、中国、韓国の4カ国のネットワークの差異を検討した。第1研究の主な目的は4カ国の社会的資本を形成する間に、ネットワーク、心理的距離、信頼感についてのものが含まれて、各文化圏で形成した対人ネットワークについて、各国の差異と広げる組織と特徴について探索的に検討することであった。

第1研究に際しては、理論的検討より、下記の仮説を導いた。

仮説1 日本の対人ネットワークは中国、台湾、韓国の3カ国と比べて閉鎖的だろう。

仮説2 日本では、中国、台湾、韓国に比べて、信頼感が低だろう。

仮説3 日本は、中国、台湾、韓国に比べて、心理的距離が遠いだろう。

仮説の検討結果は、仮説1と仮説2と仮説3について、対人ネットワーク、信頼感、心理的距離という指標を4カ国の平均値を比較した結果から、支持された。そして、4カ国で異文化適応する時、どんな組織や特徴をすれば、対人ネットワークを広げる可能性が高くなるのを検討した。組織はボランティア、同窓会、スポーツクラブ、専門職団体である。海外居住知人、外国人知人、外食頻度(家族以外)、教育問題会話は特徴である。それは海外に渡航する人たちに対する一助とする目的である。

第2研究では、実際の異文化適応過程について知ることができるため、インタビューを用いて、来日の台湾人と中国人、とそれを受け入れる日本人との対人ネットワークと心理的距離の違いから実際にどのような影響や経験を持つかを検討した。

第1研究の対人ネットワーク・心理的距離・信頼感に、日本人と台湾人

と中国人との距離感の違いが示された。第2研究のインタビューとテキスト分析においても、第1研究に見られた4カ国と心理的距離の指標との結果と一貫した結果が見いだされた。日本人の心理的距離は台湾人と中国人より遠い。第1研究・第2研究の結果から、日本の対人ネットワークは中国、台湾、韓国の3カ国と比べては閉鎖的で、組織についての信頼がとても高い安心社会という日本は、集団外の他人に対する信頼度が低いことを示したが、ある程度の時間、信頼できるきっかけなどがあれば、対人ネットワークが広げて、心理的距離が近くなるのだらうという対人ネットワークの違いが心理的距離の違いをもたらす。インタビューの第3問に仲のよい友達になるまでに時間はどのくらいかかったか？という3カ国の時間差の結果は日本人が日本人同士にしても、1年2年ぐらいの時間が必要で、台湾人と中国人の日本人と知り合う経験からの回答はよく距離感を感じるという心理的距離の違いをもたらし、それが異文化適応過程に影響することが示唆された。しかし、異文化に適応するために対人ネットワークを広げる過程で、実際に影響しているのは、それぞれの文化が培ってきた思考や行動だろう。同じ意味を共有するコミュニケーションが鍵になると考える。

張洋(2013)によれば人と人之间には、物理的にも心理的にも、どうしても消せない「距離」がある。この距離を決める「距離感」は個人の感覚だけではないことが示される。中国人である張洋は、優しいが、距離感がある「丸」という形の日本人と、距離感がなく密接に他者と関わり合う「四角」という形で中国人との差異を示している。「丸」として表現される日本人には角がなく、人を傷つけることはないが、どんなに近づこうとしても隙間が残る。この議論で描写される日本人は本研究に見られた心理的距離の指標との結果にも現れている。「丸」の日本人はある部分の面だけで接触できるが、個人の空間と相手のプライベートを守ろうとする。「四角」の中国人は自己の全てを曝け出す相手とは、互いに寂しさを感じさせない温かい関係を結ぶ。では、台湾人はなんだろうか。私自身の感じ方では



「六角形」の感覚が最も近い。丸と四角の特徴を備えた、日本と中国の間である。友達にも、どんな人にも、助けを求める前に独力で解決しようとする一方、相手を率直に受け入れて密接に関わっていきこうとする特徴を備え持つ。

筆者自身、日本に来て初めて「国によっても距離感がだいぶ違う」ということに気づいた。その距離感をもたらす要因を筆者の観察から考察する。

筆者自身の体験として、台湾人としての私は、「言語」「迷惑文化」「一人ブーム」の三つの日本独特の習慣に遭遇してきた。「言語」とは、日本語特有の曖昧な表現、直接言いたいことを言わない言語的特徴である。訪日した外国人にとって、この臆げな感じは、相手を傷つけることを避けると同時に、微妙な距離感を生み出す。日本独自の慣習として「一人でやってもおかしくないこと」、ここでは「一人ブーム」と名づけるが、単独行動が中国台湾に比べて多く許容されていることである。

「迷惑回避」とは、日本の躰に現れる文化である。日本の発達過程における教育が特徴として挙げられる礼儀正しさは、「人に迷惑をかけてはいけない」といった子供時代からの教育によるもので、他者との心理的距離を広げていると推察される。

これと対照的な考えが中国で、「人に迷惑をかけたほうが良い」という場合もありうる。「迷惑をかける」ことが仲のいい象徴にさえなる。もちろん、限度があるが、あるラインさえ越えなければ、迷惑をかけても問題はないとされる。筆者にとってはこの「迷惑文化」の差異が最も特徴的で、日本人の優しさ、独立の力を感じてきた点である。

第1研究と第2研究を通じて、対人ネットワークの特徴に違いはあれども、根気よい人と人とのコミュニケーションを通じて、異文化を適応することは可能であると感じられた。本研究の限界として、台湾人と中国人派遣留学生としての日本に滞在していたのに対して、台湾に仕事する経験を持っている日本人は一人だけであったことが挙げられる。台湾人と中国人と

の留学生としての他国に滞在しているという同じの条件としてインタビューの日本人対象者を得られなかったことが残念である。また、筆者自身が、日本で発生する異文化適応しか知らないため、台湾と中国に留学や就職する日本人にも調査を行い、台湾と中国と日本による異文化適応の違いを検討することも今後必要であると考えられる。

## V 卷末資料

日本、台湾、中国の歴史関係

日清戦争で1895年から日本統治時代となった台湾は、領有初期に匪賊の反乱が鎮圧された後、道路、鉄道、空港、通信システム、発電所、ダム、下水道がなく、清国に一方的に放棄された地元の人々が、台湾の独立宣言に基づいて「台湾民主国」を設立した。しかし、台湾民主国の国旗「黄虎旗」を各国から認められず、日道などの近代化インフラの整備が進められたほか、台湾教育令の公布・実施により、台湾人も系統的な学校教育の普及と教育水準の向上が台湾南部の水利工事をもたらした。もともと内地延長主義に基づく植民地経営だったはずなのに、近代化の促進と社会変革に伴い、台湾は日本化、近代化を開始し、台湾人の意識と精神構造が大きく変化し、半世紀前の清国時代の台湾人とは大きく異なり、同時代の中国人との質の違いが拡大した。

1945年、日本の敗戦に伴い、台湾は中国国民党軍に接収され進駐したが、接収は連合軍最高司令官マッカーサーの第1号命令に基づく「臨時接収」にすぎず、その後台湾の地位未定論と台湾独立論が形成された主な原因となった。やがて、中国共産党軍に敗れた国民党軍は、非戦闘員の家族などを連れて台湾に流入し、清軍に撃破された鄭成功のように「反攻大陸」（中国に攻め込み、国土を奪還）をスローガンに、亡命政権として台湾に頼った。戦後、台湾は国民党一党独裁の下で高圧政治を行い、1947年に発生した台湾人虐殺事件「228事件」を誘因として「白色テロ」を実施し、1949

年から1987年まで38年間にわたって戒厳令を公布した。蒋介石の息子である蔣経国は1987年に戒厳令を解除し、民主化を開始した。後任の李登輝総統は、野党の合法化、大陸出身の万年議員の引退、立法院の全面改選など民主化、自由化を迅速に実現した。台湾は2000年に初めて政党が交代した後、ようやく真の民主国家として歩み出した。

中国は80年代以降、特に米中国交樹立・米台断交の後、台湾を奪取するために様々な手段を講じてきた。また、中国では、資本主義化した経済成長に伴い、古くからの「大一統」思想がある。そのため、中国は「台湾統一」を国家目標としている。

1993年3月、中国の「一つの中国原則および台湾問題白書」は、対日宣戦布告、カイロ宣言、ポツダム宣言などに基づいて台湾の主権を主張したが、主権移転に関しては国際法の中で最も重要な戦後条約であるサンフランシスコ平和条約には言及しなかった。宣戦布告は中国の一方的な政治宣言であり、台湾主権の帰属とは関係ない。カイロ宣言は重慶政府が発表したニュース原稿で、それにサインした国家がない。

このように、台湾の歴史は400年近く植民地史である。こうした状況は戦後も続いているが、80年代以降は台湾人が自分の手で自分の国として構築しようとしている。今の中国は相変わらず「台湾統一」を国家目標としている。したがって、現在の台湾は民主自由の国として知られているが、国際的には国としての権利を享受していない。

第1研究3-2-4. 4カ国の比較の資料

対人ネットワーク指標 Group Descriptives

	国	N	Mean	SD	SE
接触人数(家族以外)	C	5819	2.844	1.537	0.020
	J	2314	3.936	1.733	0.036
	K	1389	3.16	1.390	0.037
	T	2105	4.307	1.769	0.039
接触人数(就職活動)	C	4891	0.393	1.019	0.015
	J	2075	2.09	2.007	0.044
	K	1187	1.243	1.770	0.051
	T	2015	0.816	1.329	0.030
就職紹介効用感	C	929	2.53	0.543	0.018
	J	1446	2.447	0.624	0.016
	K	552	2.134	0.668	0.028
	T	914	2.625	0.575	0.019
外食頻度(家族以外)	C	5815	1.978	1.028	0.013
	J	2296	2.51	0.851	0.018
	K	1396	2.771	1.075	0.029
	T	2132	2.406	1.028	0.022

心理的距離の指標

	国	N	Mean	SD	SE
ネットワーク獲得経験(外食時)	C	3368	2.492	0.870	0.015
	J	1862	2.251	0.737	0.017
	K	1163	2.34	0.918	0.027
	T	1646	2.184	0.884	0.022
地域挨拶人数	C	5817	3.958	1.229	0.016
	J	2315	3.37	1.195	0.025
	K	1396	3.636	1.380	0.037
	T	2123	4.217	1.126	0.024
地域相談人数	C	5801	2.925	1.391	0.018
	J	2275	1.521	0.768	0.016
	K	1395	2.567	1.240	0.033
	T	1979	2.809	1.359	0.031
地域協力関係	C	5806	5.811	1.168	0.015
	J	2320	4.891	1.210	0.025
	K	1396	4.903	1.521	0.041
	T	1867	4.731	1.803	0.042

対人ネットワークと心理的距離が異文化適応に及ぼす影響

	国	N	Mean	SD	SE
地域配慮関係	C	5814	5.917	0.974	0.013
	J	2289	4.674	1.123	0.023
	K	1396	4.762	1.457	0.039
	T	2094	5.631	1.259	0.028

信頼感の指標

	国	N	Mean	SD	SE
人間の本性	C	5803	5.448	1.201	0.016
	J	2276	4.534	1.289	0.027
	K	1395	5.022	1.568	0.042
	T	2053	4.687	1.311	0.029
一般的信頼感	C	5805	2.965	0.613	0.008
	J	2295	2.532	0.684	0.014
	K	1396	2.306	0.753	0.020
	T	2111	2.331	0.769	0.017

社会カテゴリーに対する信頼感 Group Descriptives

	国	N	Mean	SD	SE
公的信頼	C	5534	2.88	0.577	0.008
	J	2206	2.63	0.562	0.012
	K	1396	2.62	0.619	0.017
	T	1679	2.35	0.603	0.015
私的信頼	C	5527	3.15	0.445	0.006
	J	1931	2.97	0.479	0.011
	K	1396	3.03	0.521	0.014
	T	1880	2.98	0.44	0.010
組織信頼	C	5287	2.78	0.456	0.006
	J	2105	2.33	0.517	0.011
	K	1396	2.57	0.514	0.014
	T	1595	2.61	0.401	0.010

職業ネットワーク Group Descriptives

	国	N	Mean	SD	SE
職業ネットワーク	C	5758	13.1	2.35	0.031
	J	2192	12.6	2.24	0.048
	K	1396	13.1	2.28	0.061
	T	2092	14.2	2.84	0.062

## 参考文献

- EASS(*East Asian Social Survey*) (2012). データで見る東アジアの社会的ネットワークと社会関係資本—東アジア社会調査による日韓中台の比較4—。ナカニシヤ出版
- EASS 研究論文集(JGSS Research Series)  
文部科学省 (2007). 10万人留学生計画  
独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の「外国人留学生在籍状況調査結果」  
G.R. ファンデンボス監修 繁枅算男・四本裕子監訳. APA 心理学大辞典. 培風館
- 岡太彬訓 (2011). スペクトル分解による外国人に対する親近感の分析—EASS 2008 のデータを用いた非対称多次元尺度構成法の応用—. 日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集[11], JGSS Research Series No.8
- 楊益・伊藤孝恵 (2018). 外国人留学生の大学入学期の心理状態に関する一考察—PAC 分析を用いた学部新入生のケース—. 高等教育と国際化: 山梨大学教育国際化推進機構紀要年報(5), 22-32, 2019-11-30
- 二宮克美編著 (2016), 「近づきたい欲求もあるが傷つくのをおそれて一定距離以上は近づけない心理のこと」(「ヤマアラシのジレンマ」について)『ベーシック心理学』 医歯薬出版
- 心理距離(美学的「心理距離」)エドワード・ブロウ(Edward Bullough) (1912). 台湾 WIKI の紹介  
美學概念(美的感覚の概念)  
Edward Bullough. "'Psychic Distance' as a Factor in Art and as an Aesthetic Principle." *British Journal of Psychology* 5 (1912): 87-117
- 西田有希・石川健介 (2017). 大学生の友人に対する心理的距離と友人関係における態度の関連. 日本教育心理学会総会発表論文集, 59(0), 641-641, 2017
- 岡田涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから—. 日本パーソナリティ心理学会パーソナリティ研究, 14(1), 101-112, 2005
- 谷口友梨・池上知子 (2018). 心理的距離が対人認知プロセスに及ぼす影響: 解釈レベル理論の観点から. *Studies in the humanities : Bulletin of the Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University* 69, 99-114, 2018
- 張小嫻 (1997). 《荷包裡的單人床》皇冠出版
- 古谷嘉一郎 (2008). 対人心理学研究の最前線(第3回)人に気持ちを伝える手段—コミュニケーション・メディアが対人関係に果たす役割—. 繊維製品消費科学, 49巻5号, pp. 326-334, 2008
- 金原由季・巖岩秀章 (2012). 大学生の信頼感に及ぼす日常的出来事の影響. 日

- 本心理学会大会発表論文集, 日本心理学会第76回大会
- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43巻4号, pp. 364-371, 1995
- 菅原正和・田村和香奈・嶋野重行 (2005). 青年期の信頼感形成に及ぼす心理学的要因. 岩手大学教育学部研究年報, The annual report of the Faculty of Education, Iwate University 64, 39-52, 2004
- 山岸俊男 (Yamagishi & Yamagishi, 1994; 山岸 1998). 信頼の解き放ち理論
- 山岸俊男 (1999). 「安心社会から信頼社会へ」—日本型システムの行方. 中公新書
- 社会的資本
- ソーシャル・キャピタル フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
- 【ソーシャルキャピタルとは】人々の関係性や繋がりは組織の重要資源
- 五十嵐祐 (2008). 人と人とのつながりが規定するコミュニケーションネットワークの対人心理学—. 繊維製品消費科学, 49巻8号, pp. 530-540
- 張洋 (2013). 「距離感」について—やさしい日本・寂しい日本—, JAL 財団 外国人学生に対する研修 研修論文
- トピックモデルの評価指標 Perplexity 『トピックモデルによる統計的潜在意味解析』読書会ファイナル～佐藤一誠先生スペシャル～LT 資料
- トピックモデルの評価指標 Coherence 研究まとめ MATLAB Visualize Topics Using Word Clouds Analyze Text Data Using Topic Models - MATLAB & Simulink - MathWorks 日本
- 川内規会 (2006). 大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究. 青森県立保健大学雑誌, 7(1), 37-43, 2006-06
- 文部科学省 (2020). 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学生数」等について
- 有馬淑子 (2019). 集団と集合知の心理学. ナカニシヤ出版
- 曾秋桂 (2021). テキスト分析と AI のテキストマイニング技術との協働—村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を中心に— 10.6205/jpllat.202106\_(49).0003
- 鄭任智 (2005). 「守屋留學生交流協会奨学生の記 台湾の歴史から台中関係を見る」

# **Interpersonal Networks, Psychological Distance, and Cross-cultural Adjustment: A Study of Three East Asian Countries**

SHEN, Yu Hsuan and ARIMA, Yoshiko

## **Abstract**

The first study investigated data from an international comparative study (East Asia Social Survey [EASS]) conducted in 2012. This study aimed to determine whether cultural differences, shown as the tendency of social network formation, relate to intercultural adaptation.

Based on the first and second studies, you can communicate patiently with your partner, even with different interpersonal networks. It is believed that the sense of emotional distance inherent in Japanese courtesy is learned early in life and becomes ingrained. Long-term communication is essential when interacting with someone from a different culture.